

荒屋遺跡と中土遺跡

—共通点と相違点の実態把握と検討—

加藤 学

はじめに

北魚沼郡川口町 荒屋遺跡と南蒲原郡下田村 中土遺跡は、東北日本を代表する細石器文化の遺跡であり、その重要性については先学諸氏が指摘しているところである。両遺跡は、細石刃製作過程の分類から、「削片系」〔鶴丸1979〕と大枠でグルーピングされる一方、多くの相違点が認められ〔中村1965a〕、その解釈をめぐっては様々な議論がある。ここでは、両遺跡の石器群を詳細に比較することで、共通点と相違点を明らかにしたい。そして、石器群の実態を把握して、共通点と相違点が意味することについて検討していきたい。

1. 荒屋遺跡と中土遺跡をめぐる研究史

(A) 荒屋遺跡の概要

荒屋遺跡は、新潟県北魚沼郡川口町西川口荒屋に所在する。信濃川と魚野川との合流点の段丘上に立地し、標高86mを測る。遺跡は、1957年に星野芳郎氏・井口通泰氏により発見され、1958年に芹沢長介氏により発掘調査（第1次調査）された〔芹沢1959b〕。それから30年後の1988年には第2次調査、1989年には第3次調査が実施され〔芹沢ほか1990〕、遺跡の重要性が再確認されている。

1958年の第1次調査では、荒屋遺跡以前に確認されていた矢出川遺跡〔芹沢1954〕と顕著に異なる細石刃石器群であることが明らかにされた〔芹沢1959b・1961〕。芹沢氏は、「矢出川遺跡における石器の組み合わせをみると、細石刃と半三角錐形の細石核が主体をなして、他にわずかばかりの搔器、礫器その他がわずかにふくまれているにすぎない。ところが、この荒屋遺跡では細石刃と舟底形細石刃核とが組み合わされているらしく、さらに、おびただしい彫刻刀とその削片とが発見されていることに特殊性が認められるのである。」〔芹沢1959b〕と述べている。

細石核の形態の相違は、細石刃製作技術の相違を反映しており、荒屋遺跡における舟底形細石核は湧別技法〔吉崎1961〕札滑型によるもの〔吉崎1963〕と評価された。また、採集資料を分析した大塚和義氏は、本州における湧別技法は「札滑型細石刃核に特徴づけられるステージのもの」としながらも、「いくつかの脱落現象がみられる」ことを指摘した。そして、荒屋遺跡に代表される舟底形細石核を「荒屋型細石核」と命名した〔大塚1968〕。また、湧別技法のほかにホロカ技法〔Morlan1967、鶴丸1979〕による細石核の出土も確認されている〔織笠昭1979〕。

石器組成では、特徴的な形態の彫器が多量に伴うことが注目され、「荒屋型」の名称が与えられている〔芹沢1958・1959a・1959b〕。第1次から第3次調査分で574点、そのほか表採資料を含めると他に例をみない膨大な数量となる。すなわち、一形態に極めて偏った石器組成であることがわかる。しかし、荒屋型彫器の素材を作出したと考えられる石核は、彫器の出土点数と見合う点数が出土していない。わずかに扁平石

核[芹沢 1959b、織笠昭 1979]の出土が指摘されているが、その数量は少ない。第2・3次調査で出土した細石核と荒屋型彫器との接合資料は、この問題を解決する上で重要な意味をもっている。また、鏃形石器といった、他の遺跡にみられない特異な形態が組成に加わることも特徴的である。

石材は、報告書が未刊行であるため、具体的に示すことはできないが、珪質頁岩が圧倒的多数を占めているようである。しかも、その多くは風化面が光沢を帯びる特徴的なものであり、山形方面で多く産出されるものに類似する。ただし、多量に用いられている状況を勘案すれば、遺跡周辺において未知の原産地が存在する可能性もある。

また、細石器文化期の遺構が検出されていることも特筆される。第1次調査で相沢忠洋氏によって確認された土坑をはじめ、竪穴住居状遺構とその内部の炉と推定される遺構が検出されている。

（B）中土遺跡の概要

中土遺跡は、南蒲原郡下田村大字長野小字中土に所在する。五十嵐川とその支流守門川との合流点の段丘上平坦面に立地し、標高115mを測る。遺跡は、1962年に中村孝三郎氏により発見され、1964年の発掘調査後に報告書が刊行されている[中村 1965b]。その後、1996年には新潟石器研究会が再検討の結果を報告している[新潟石器研究会 1996]。

発掘調査の結果、杉久保系ナイフ形石器石器群と削片系細石刃石器群が検出された。特に、湧別技法による細石刃石器群の発見は、学史上、重要な意味を持つ。すなわち、中土遺跡の発見以前には、北海道と荒屋遺跡の中間地域において湧別技法は発見されておらず、荒屋遺跡を本州において孤立した遺跡であるとする滝沢浩氏の見解[滝沢 1964]に見直しを迫る発見であった[中村 1965b]。

しかし、細石刃石器群にはナイフ形石器石器群が混在しており、両者の共伴関係について議論があった。新潟石器研究会による再検討では、遺物の母岩別分類とその分布状況を勘案して、ナイフ形石器石器群と細石刃石器群に分離されると結論付けている。確かに、指標的な形態における区分の蓋然性は高いものの、母岩別分類と分布状況の相違を文化層分離に直結することの問題点も指摘されている[織笠昭・織笠明子 1997]。このように作業過程に問題もあるが、これまで調査されている他の遺跡の状況と比較すれば、およそ妥当な分離であると考え、指標的な形態を中心に検討を進めることにしたい。

（C）荒屋遺跡と中土遺跡をめぐる研究史

中土遺跡の発掘調査後、荒屋遺跡と中土遺跡をめぐる共通点と相違点の存在が着目された。特に、両遺跡をめぐる編年観については、活発な議論が展開されている。編年観を考える上で重要な役割を担う両遺跡の細石核は、区分と変遷に関する三つの案が示されている[織笠昭 1979]。

麻生優氏は、技術・形態と他地域における変遷を考慮して、「中土（半船底状細石核）→荒屋（船底状細石核）」という変遷を想定している[麻生 1965]。中土を調査した中村孝三郎氏も、中土においてナイフ形石器文化の伝統技術が、強く保持されていたと評価し、「中土（船体形石核）→立川→荒屋」という変遷を想定した[中村 1965b]。ただし、中村氏はナイフ形石器文化と細石器文化の重複遺跡である可能性も指摘しており、両文化の石器の混在を示唆している。

これに対し、杉原莊介氏は細石核の形態分類を行い、各分類における土器共伴の有無を基準に「半船形石核（荒屋）→船形石核（中土）」という変遷を想定した[杉原 1974]。ただし、土器は西北九州の西海技法[麻生 1965]に伴うものであり、これと中土出土の細石核を一括できるかどうかは課題といえる。

また、佐藤達夫氏は荒屋と中土の細石核を「舟底形石核」と分類している。そして、沿海州における編年観との対応関係を検討し、「舟底形（白滝）からセルト形（蘭越型）への変遷」を導き出している〔佐藤1974〕。すなわち、荒屋・中土を一括して扱うことにより、両遺跡をめぐる編年差について言及していない。

これら三つの区分・変遷を整理した織笠昭氏は、両遺跡の「出土遺物を中心に据えた資料化を基準にするというよりは、北海道地方や西南日本との比較というかたちでのみ細石核の問題が語られることが多かつたとも言える」と指摘した。そして、このことが両遺跡の関係についての見解が一致していない一因である可能性を示した〔織笠昭1979〕。

こういった問題を受けて織笠氏は、荒屋・中土に月岡遺跡を加えた3遺跡の比較検討を試み、まずは細石核の種類と製作過程、石器組成と製作技術の実態を明らかにした。そして、各遺跡から出土した細石核を形態分類し、各種類の共伴関係を整理することから変遷観を導き出そうとした。その結果、「時間的に併行する、細石核の組み合わせとしてみることができる」とし、3遺跡間に編年的な先後関係を認めることは困難と結論付けている〔織笠昭1979〕。

その後、両遺跡をめぐっては、大きく「中土→荒屋」と「荒屋→中土」といった変遷観が示されている。「中土→荒屋」という変遷観は、立木宏明氏・吉井雅勇氏が論じている。両氏がその根拠にあげているのが、石井浩幸氏・桜井美枝氏らによる東北地方における変遷観である〔石井1987、桜井1991〕。桜井氏は、「荒屋での細石刃生産のあり方が、典型的な湧別技法ではなく、ある程度の変質を経たものと考えることから、「幌加型」は、本州においては湧別技法よりは若干後出のものと考える」〔桜井1991〕とし、ホロカ技法が伴う荒屋遺跡に後出的要素を見出している。立木・吉井両氏は、石井・桜井両氏の「ホロカ型が後出」という見解を根拠に「削片系のみ保有する段階（中土・大平）から削片系+ホロカ型への段階（荒屋・月岡）が想定できる〔立木1996a〕」としている〔吉井1998・1999〕。

ただし、木村英明氏は湧別技法の本場である北海道において、教科書的な『湧別技法』だけが単独に存在する石器群ではなく、ホロカ技法を含む複数の技法が一連の製作工程の中に含まれることを明らかにしている〔木村1995〕。こういった状況を踏まえれば、ホロカ技法が伴うことのみを根拠に変遷観を論じることは難しいと考えられる。

立木・吉井両氏はこれに加えて、青森県大平山元II遺跡で層位的に湧別技法→ホロカ技法が示されたこと〔横山1993〕、縄文時代草創期に通じるであろう尖頭器の共伴関係〔立木1996a、吉井1998〕、ホロカ型細石核を中心とする樽口遺跡A-MH文化層で彫搔器と大形剥片素材の搔器など草創期に通じるであろう石器形態の共伴〔立木1996b、吉井1998〕を根拠としている（註1）。なお、吉井氏は荒屋と中土が時間的併行関係にある可能性を指摘し、両者にはほとんど時間差がないことを加えている〔吉井1998〕。

「荒屋→中土」という変遷観は、菅沼直氏が論じている。菅沼氏は、荒屋・中土を「湧別技法札滑型細石核を有し、珪質頁岩主体の石器群」に分類し、荒屋型彫器の共伴の有無から「荒屋・月岡・大刈野→中土」という変遷観を示した〔高橋ほか1993〕。また、「北海道においては、ホロカ型細石刃核が削片系細石刃核と共に伴する例が多いことから両者は共存するか、もしくは前者が若干後出する」とし、ホロカ技法が認められる荒屋に後出的要素を認めている〔菅沼・野尻湖人類考古グループ1994〕。

その後、中土遺跡の再整理に携わった菅沼氏は、「荒屋型彫刻刀形石器の有無が、石器群の時期差あるいはセトルメント・パターンの差のどちらを表すかは、現時点では判断しがたいが、後者の可能性が強いと考えられる」とし、変遷観について慎重な立場を示すとともに、「セトルメント・パターンの差」という新たな可能性を示した〔新潟石器研究会1996〕。

以上のように、荒屋遺跡と中土遺跡をめぐる変遷観については、研究者間で大きく異なるのが実情である。本稿では、まず両遺跡の共通点と相違点について整理することとしたい。

2. 荒屋遺跡と中土遺跡の比較検討

(A) 石器組成

荒屋遺跡と中土遺跡は、全面が発掘調査されたわけではない。しかも、荒屋については、正式な報告書の刊行には至っておらず、内容の詳細について十分に把握できないところもある。ここでは、これまでに公表されている報告書・概報・資料紹介に示されたデータを集成して検討の材料としたい。現段階で公表されている資料を集成したのが第1表および第2・3・6~13図である。

① 細石刃

細石刃は、荒屋で1241点（第2図）、中土で22点（第3図）の出土が確認されている。荒屋で圧倒的に多く出土していることがわかる。これは、国内の細石刃石器群においても、有数の出土点数である。これに対し、中土では発掘調査で細石刃石器群のブロックの中心部を掘り当てていないこともあるが、数が少ない。数量に大きな差があるため、単純に比較できない面もあるが、両遺跡の細石刃には様々な相違が認められる。

荒屋と中土の細石刃は、中村孝三郎氏が中土の報告書において詳細に記述している。それによると、荒屋では長さ20~30mm、幅5~8mm、厚さ1~2mmであるのに対し、中土では長さ36~44mm、幅6~10mm、

第1表 荒屋遺跡と中土遺跡における石器組成

荒屋遺跡

文献	細石刃	細石核	細石核原形	細石核削片	細石核作業面再生削片	形器	形器母型	形器削片	搖器・削器	尖頭器	縫合石器	鋸器	縫器	二次加工ある削片	石刃・削片砂片	石核	合計
第1次 浮浜ほか 1990	682	51				425		1142	11	7	4	2	6	45	2	1	2378
第2・3次 浮浜ほか 1990	481	5	8			149	3	609	10			2		61	3213	4	4545
採集資料 中村 1965	6	2	2			6			3	3	2						24
採集資料 大庭 1968		1				1											5
採集資料 堤 1987	38			1		21		3									53
採集資料 立木 1988	42	2	2			14			2						1		63
採集資料 富澤 1990		1															1
採集資料 美安 1995						3											3
採集資料 竹園 1996						26			1								27
採集資料 立木 1996b	2																2
採集資料 山木 1998						4											4
採集資料 加賀 1998									1								1
採集資料 菅原 1999		1	3	2	73				3	3	3	1					88
採集資料 徳津 1999					5			7									12
合計	1241	63	16	2	727	3	1761	31	12	9	5	6	106	3219	5	7206	

中土遺跡

文献	細石刃	細石核	細石核原形	細石核削片	細石核作業面再生削片	形器	形器母型	形器削片	搖器・削器	尖頭器	縫合石器	鋸器	縫器	二次加工ある削片	石刃・削片砂片	石核	合計
発掘・再整理 新潟石器研究会 1996	22	4								15	1		2	1	31		80

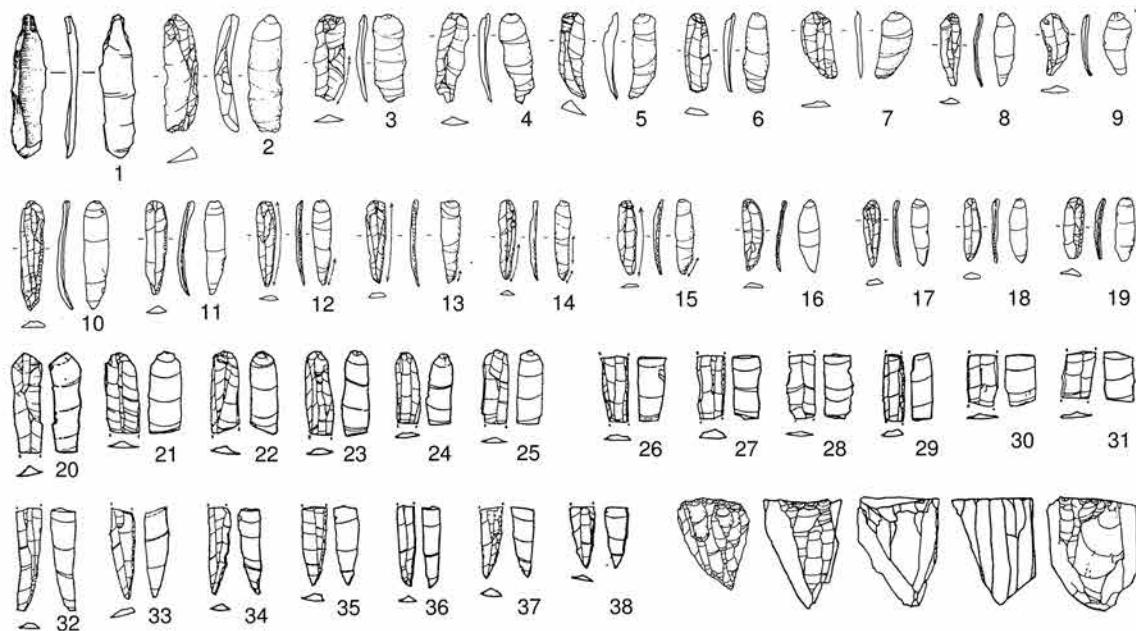
第2表 中土遺跡における母岩別器種構成
(表採資料含む)

母岩番号	遺物数	MB	MC	DR	SC	RF	UF	B	F	PT	母岩の特徴
真岩M-1	7	7									灰白 (Hue 2.5Y 7/1)
真岩M-2	3	3									灰黄 (Hue 2.5Y 7/2)
真岩M-3	3	3									黒褐 (Hue 10YR 3/2)
真岩M-4	4				3		1	2	8	21	灰黄褐 (Hue 10YR 6/2)
真岩	58	8	4	2	12	1					黒 (Hue N 2/0)
黒耀石	3	1						2		2	1
輝灰岩	1										1 (Hue N 6/0~5/0)
合計	79	22	4	2	15	1	3	8	23	1	

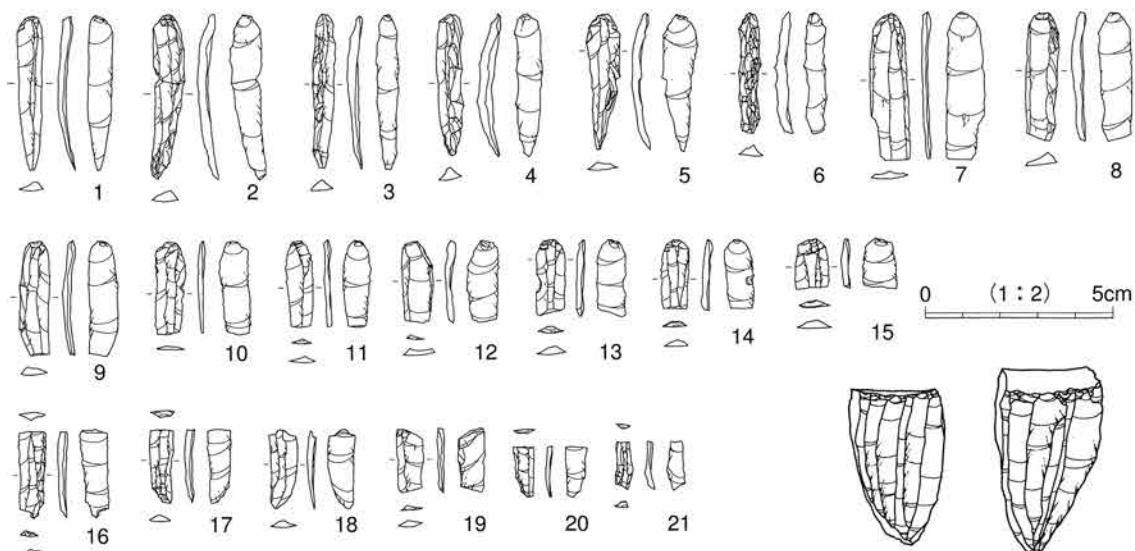
〈凡例〉器種：MB=細石刃、MC=細石核、DR=鍛形石核、SC=ステレインバー、RF=二次加工の有る削片、UF=使用面の有る削片、B=石刃、F=剝片、PT=鍛器、KN=ナイフ形石器、P=尖頭器、G=彫刻刀形石器、GS=彫器削片、C=石核、母岩の特徴：色調は森林木産省技術会議事務局「新版標準土色図」(1995後期版)による。



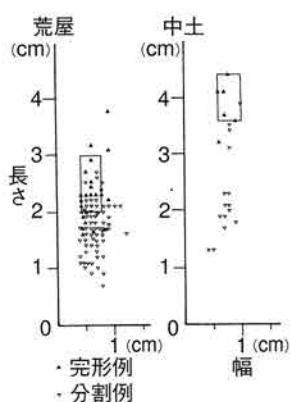
第1図 新潟県内における細石器文化の遺跡



第2図 荒屋遺跡出土の細石刃と細石核の作業面

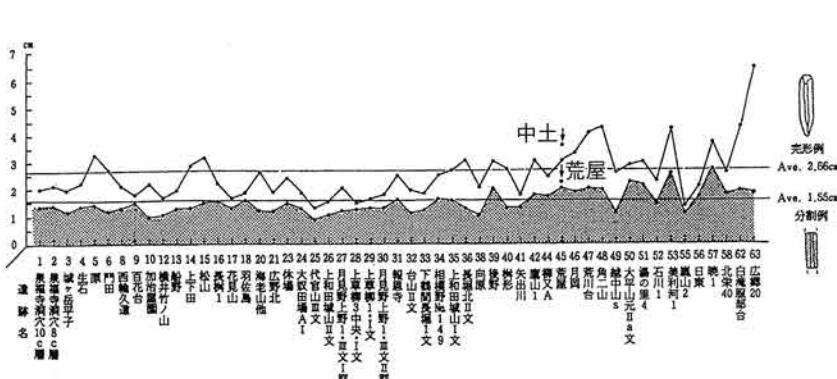


第3図 中土遺跡出土の細石刃と細石核の作業面



第4図 細石刃の大きさ

(枠は中村孝三郎氏が
示した大きさの分布)



第5図 細石刃の長さの変化

厚さ 1.8mm ~ 3.5mm (第4図の枠内) としている。

第4図に、細石刃の大きさを図示した。これからも明らかにおり、大きさの分布が両遺跡で全く異なる [永塚1997]。これは単に、折断を経ているか否かといった違いではなく、完形細石刃の大きさの違いを反映している。第4図のデータをもとに完形細石刃の平均的な大きさを求めたところ、荒屋で長さ23.2mm・幅6.3mm (n = 25)、中土で長さ38.5mm・幅7.2mm (n = 6) であった。幅は大きくは違わないが、長さは15mm ものの差があり、中土の細石刃は荒屋の1.66倍もの長さをもつことになる。このことは細石核の作業面の長さにも反映されている。中村氏が報告しているとおり、中土遺跡の細石刃は荒屋遺跡に比べて大形ということができる。

しかし、織笠昭氏の集成 (第5図) [織笠昭 1983・1993・1994] によれば、荒屋における完形細石刃の長さの平均値は30mm であり、中村氏が示したデータ・今回得られたデータおよび細石核の作業面長 (第2・3図右下) と大きく異なる。筆者が今回対象としている未報告資料のデータも含めて再検討する必要があろう。いずれにしても、中土の細石刃の長さは荒屋より長いことができる。

それでは、今回得られたデータは、列島内における様相と比較すると、どのように位置付けられるのであろうか。織笠昭氏の集計 [織笠昭 1983・1993・1994] によれば、完形細石刃の平均的な長さは26.6mm である。意外なことに荒屋の平均値はそれを下回っている。一方、中土はそれを大きく上回っている。織笠氏が示している第5図と比較するならば、いわゆる「削片系」の石器群において荒屋は最も小さな一群となり、中土は珪質頁岩を主体とするものの中では最も大きな一群となる。中土例は、山形県角二山遺跡や北海道美利河1遺跡など珪質頁岩の原産地に近い遺跡との共通点が窺える。ただし、この点については細石刃の製作技術や細石核のサイズと石材原産地との関係を含めて検討しなくてはならない。

次に形態上の比較であるが、中村孝三郎氏は、中土の細石刃は、荒屋と比べると彎曲度が小さいことについて触れている。そして、荒屋出土の細石刃に認められる二次加工や摩滅痕跡が、中土には認められないことを指摘している。この2点の相違を指摘していることは極めて重要である。

筆者も、今回の比較をとおして大きさ以外にも形態上の重大な相違があるものと考えた。荒屋では末端部付近の形態の個体差が著しいのに対し、中土では両側縁が直線的に平行する範囲が長く、鋭い末端部を有するものが多い。大きさ・形態ともに、荒屋はより齊一性が低く、中土はより齊一性が高いものと理解された。

この形態的齊一性の差と、二次加工の有無は密接に関連する可能性がある。すなわち、二次加工が施されることがある荒屋ほど齊一性が低いことと、二次加工が施されることとは無関係ではないのかもしれない。荒屋における形態的齊一性は、二次加工による整形によって確保されていたと考えられないだろうか。

実際、荒屋に特徴的な二次加工を有する細石刃の形態的齊一性は極めて高い (第2図10~19)。あるいは、二次加工によって形態的齊一性が確保されるため、未加工の段階での形態に若干のバラエティーが存在しても問題なかったのであろうか。また、多くの事例に認められる裏面右側縁の二次加工は、より強い彎曲度を修正するのに有効な技術であったと考えられるかもしれない。一方、荒屋とは対照的に、より齊一性の高い形態が細石刃剥離の段階で確保される中土例は、二次加工による整形を経る必要がなかったのであろうか。

荒屋の細石刃に認められる二次加工については、綿貫俊一氏・堤隆氏が重要な指摘をしている [綿貫・堤 1987]。「正面右側縁にそって連続する加工痕がみられ、裏面右側縁の末端部に微細な加工の認められる完形細石刃」が特徴的であるとし、「荒屋型細石刃」の名称を与えている。そして、これは折断して着柄さ

れたのではなく、二次加工が施された完形の状態で着柄されたことを想定している。二次加工が特定の範囲に施されることと、形態的斉一性の確保とが如何に関連するのか検討しなくてはならない。また、着柄方法はもとより、より根本的な問題である着柄された細石刃自体の姿について検討する必要もある。

② 細石刃製作関連

細石刃製作関連の資料は、荒屋で細石刃1241点、細石核（第6図1～11）・細石核原形（第6図12）63点（註2）、削片16点（第7図1～7）、作業面再生剥片2点（第7図8）が確認された。一方、中土では細石刃22点、細石核・細石核原形4点（第8図）が確認された。細石刃・細石核・細石核原形・削片等、湧別技法を中心とした細石刃製作過程を示す一連の資料が認められる。しかし、大別形態の種類は一致するものの、出土点数や細別形態のレベルになると、著しい相違が認められる。ここでは、大別形態の数量差を中心に触ることとし、細別形態の差は細石刃製作技術の項で詳細に触れることとする。

細石刃製作技術をもととよく反映している細石核および細石核原形の数量は、両遺跡で大きく異なる。この相違は、総数が異なるのであるからもととむことである。しかし、細石核と細石刃の数量比をみると、荒屋で細石核1点に対し細石刃19.7点、中土では細石核1点に対し細石刃5.6点となる。荒屋については、採集された細石核が含まれているため、より実際の比率に近いと考えられる発掘資料に限定してみても20.8点で、ほぼ同じ比率となる。このことは、如何なることを意味しているのであろうか。

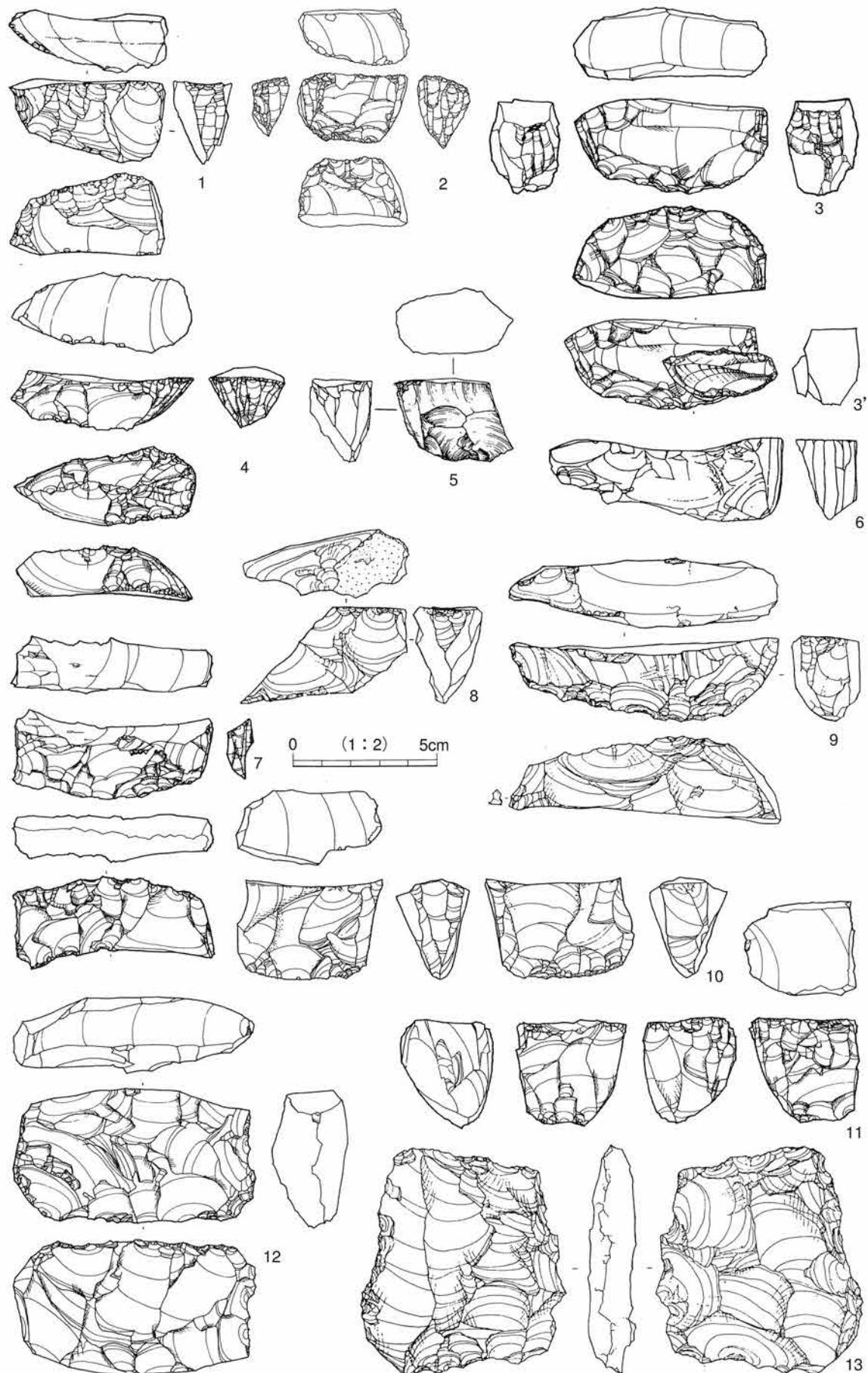
単純に考えれば、両遺跡における細石刃製作数量の差といえる。しかし、荒屋では細石核の成形・整形時に作出される剥片や削片が多数認められるのに対し、中土では細石核の成形・整形時に作出される剥片は少なく、削片は出土していない。荒屋では明らかに石器製作が行われているのに対し、中土ではそれを積極的に評価する材料に乏しいのである。このことを考慮すると、数量差以外に別途の可能性を想定する必要がある。

細石刃剥離についても同様のことがいえる。中土の再整理報告において諫山えりか氏は、細石刃と細石核とで母岩を共有しないものと判断している（第2表）。ちなみに、「貢岩」と分類されているものは、単体の母岩を集めたものであり、1母岩を表してはいない。すなわち、少なくとも現在確認されている細石核から細石刃が剥離された可能性は低いものと考えられる。調査範囲外に細石刃と母岩を共有する細石核が存在する可能性もあるが、細石核・細石刃が直接された時点の姿を表している可能性も想定する必要があろう。搬入品であれば、細石刃は中土以前に経由した遺跡において製作されたものということになる。このことと細石刃の形態的斉一性が高いことは無関係ではないのかもしれない。すなわち、搬入されたとするのであれば、搬出する段階で必要な形態が選択されたはずであり、形態的斉一性は選択時に得られた可能性もある。

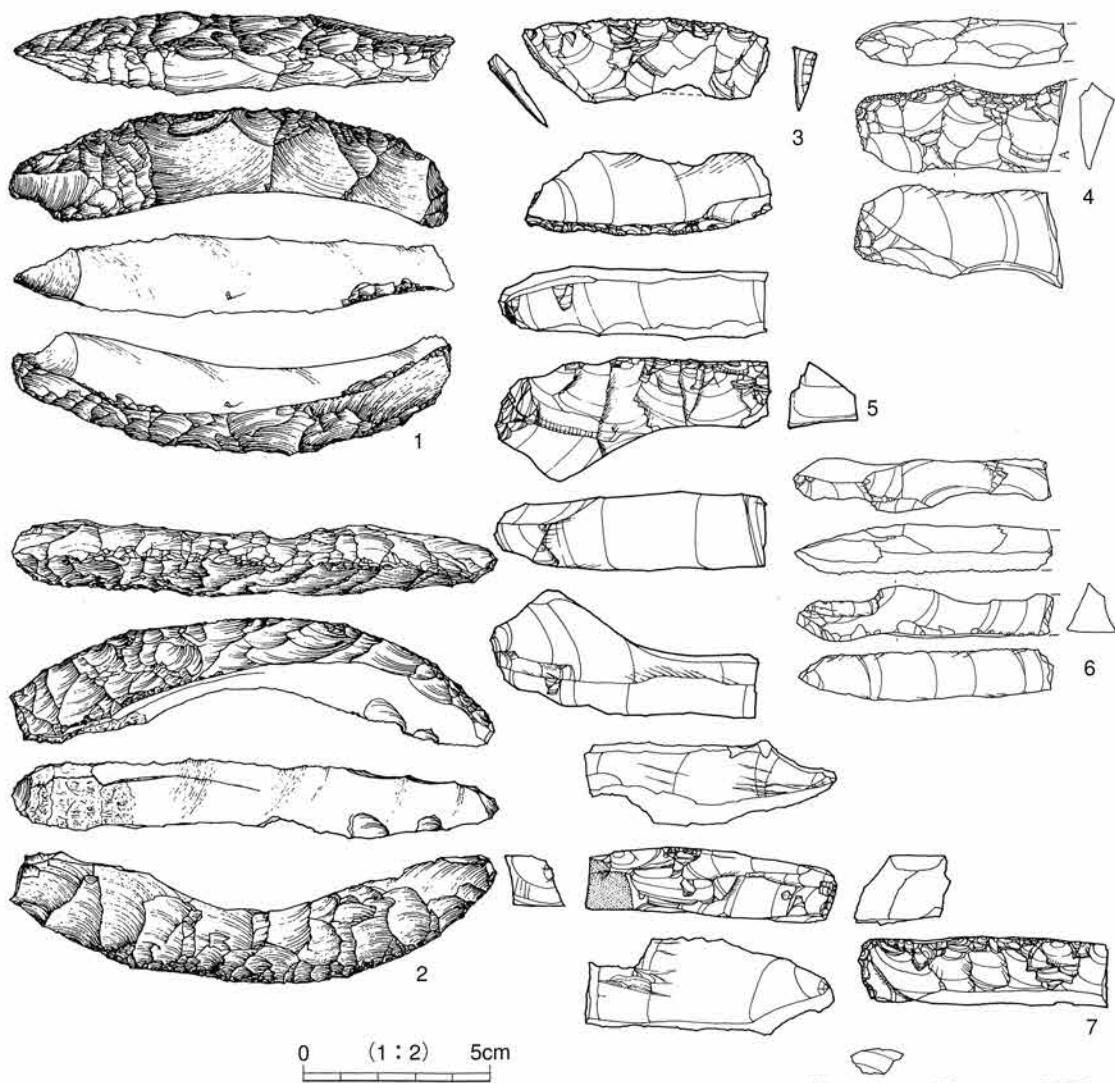
このように、両遺跡では少なくとも細石刃製作に関連する資料の数量比に明らかな差が認められる。荒屋では細石核の成形・整形から細石刃剥離に至る一連の作業が行われているのに対し、中土ではそのような痕跡が希薄である。中土の資料の多くは、他の遺跡で製作され、搬入された時点での姿をあらわしているとも考え得る状況にある。すなわち、両遺跡をめぐる数量の差は、遺跡内で行われた細石刃製作に関する作業範囲（過程）の相違を表している可能性を指摘できよう。

③ 彫器

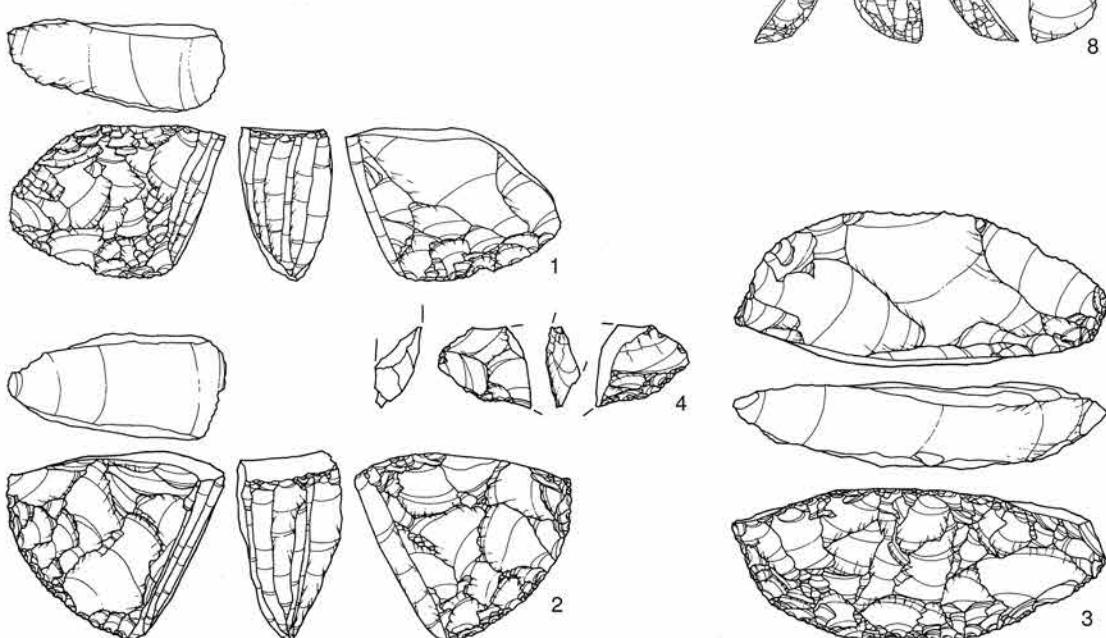
荒屋で彫器727点（第9図1～28）、彫器の母型3点（29・30）、削片1761点（31～34）が確認された。未完成品と考えられる母型や削片の出土は、遺跡内で彫器の製作や変形が行われていたことを示唆している。特に、彫刀面の作出・変形時に生じた削片の多さは注目され、彫器の長さの変異幅は削片剥離の頻度



第6図 荒屋遺跡出土の細石刃製作関連資料（1）



第7図 荒屋遺跡出土の細石刃製作関連資料（2）



第8図 中土遺跡出土の細石刃製作関連資料

と対応する可能性が高い。

荒屋の石器組成において大きな割合を占める彫器ではあるが、そのほとんどは、いわゆる荒屋型彫器〔芹沢 1958・1959a・b〕である（註3）。また、荒屋型彫器を意識した形態であることは確実なもの、横長剥片を素材とするもの（6・13）、全周に急角度の調整が及ばないもの（20～22）など典型例といえないものも認められる。そのほかにも、双面彫器（24・25）、右肩に彫刀面を有するもの（26～28）も認められるが、荒屋型彫器との共通点が多い。

当該期の双面彫器の彫刀面は、右肩より左肩のほうがより長く、幅広である傾向が強い。左肩の彫刀面をより強く意識していることが窺えるのである。月岡遺跡出土の双面彫器〔中村・小林 1975〕を観察したところ、右肩→左肩という切り合い関係が認められた。すなわち、右肩の彫刀面は左肩の彫刀面を作出する際の打面とも理解できる〔加藤学 1999〕。また、右肩の彫刀面が、フラット・グレイバー状剥離〔綿貫・堤 1987〕と連続的に分布するものもあり、そこに技術的連続性を認めることができるかもしれない。右肩に彫刀面を有するものについても、彫刀面が作出される位置以外は荒屋型彫器の条件を満たしている。

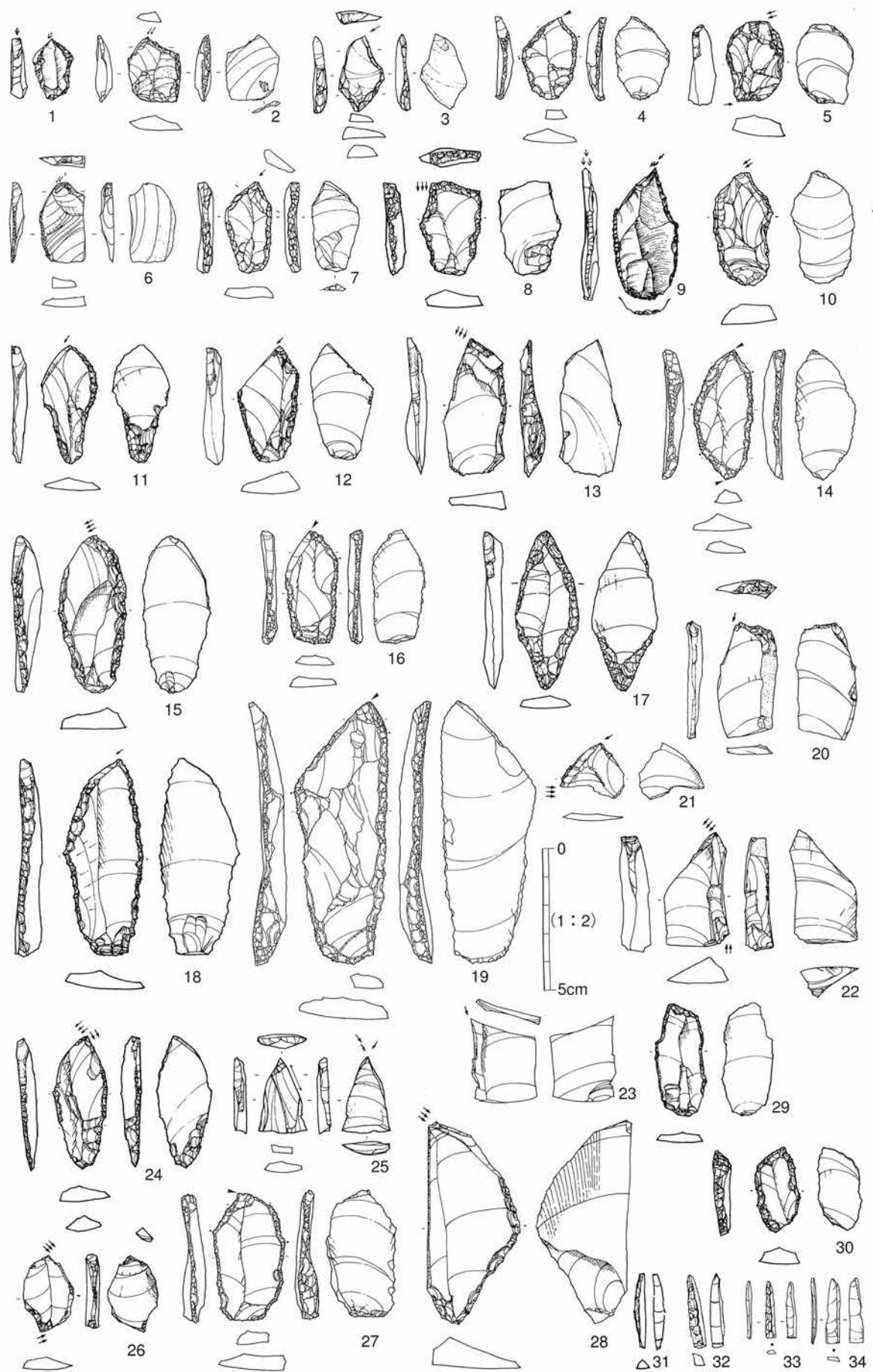
このように、荒屋型彫器の範疇に含めるか否か判断に迷う形態についても、荒屋型彫器との形態的・技術的連続性を看取することができる。特定形態がここまで突出する例は稀有であり、遺跡の特異な機能を反映している可能性がある。

彫器は、しばしば木や骨・角への溝きり具と考えられ、彫刀面の先端が機能部位とされている〔S.A. セミヨーノフ 1968〕。細石器文化においては、細石刃を嵌め込む溝きりに用いられたとされる。一方、芹沢長介氏は「使用痕が残されているのは刃先ではなく、多くは溝状剥離（彫刀面）の中央に近い部分」で「実際には物を削る道具であったかもしれない」と指摘している〔芹沢 1974〕。芹沢氏の指摘は、近年の使用痕研究により明らかにされつつある〔山田 1984、芹沢ほか 1990、美安 1995、堤 1997、伊藤 1996〕。被加工物の理解については、肉・皮へのスクレイプなどの作業に用いられたものも存在するようである〔山田 1984〕が、骨角器製作への機能的特定性が見出されている〔堤 1997〕。

荒屋型彫器を有した集団は、その分布が現在のサケ・マスの天然遡上範囲と一致すること〔加藤晋平・松本 1984、加藤晋平 1984〕、荒屋の石器から魚類の脂肪酸が検出されていること（註4）、荒屋と同様の立地条件にある東京都前田耕地遺跡の縄文時代草創期の堅穴住居跡からサケ科の頸歯が多量に出土していること〔加藤暁生 1985〕などから、サケ・マス類の内水面漁撈と密接に関連する可能性が指摘されている〔佐藤宏之 1992〕。こういった状況を考え併せれば、荒屋型彫器は角製鉈や角製植刃鉈などの漁撈具製作や魚皮加工などに用いられた可能性があるという〔堤 1997〕。信濃川と魚野川の合流点に立地する荒屋遺跡は、そのような生業活動を展開する上で好都合な条件にあったといえよう。

ただし、遺跡の分布やシベリアにおける動物遺体の検討から漁撈活動との関連を積極的に評価せず、シカ等を対象とした狩猟活動が展開された可能性も指摘されている〔鈴木忠司 1985、加藤博文 1996a・b〕。北海道柏台 1 遺跡から出土した骨組織構造は偶蹄目であった可能性が指摘され、断定できないもののシカに似ていると報告されている〔福井 1999〕。柏台 1 遺跡は、荒屋・中土とは年代差のある細石刃石器群と考えられるが、今後は動物遺体に基づいた生業活動の検討が必要となってこよう。

一方、中土では彫器が 1 点も加わらず、対照的な在り様が理解される。遺跡が部分的にしか調査されていないため、組成に加わらないことが真実であるかどうかはわからない。しかし、彫器が加わらないことを補完するかのように、先刃搔器が安定的に加わることは注目すべき事実である。両者の関係を検討することが重要な課題と考えられる。



第9図 荒屋遺跡出土の彫器

④ 搔器

搔器は、荒屋で22点（第10図）、中土で17点（第11図）が確認された。総数からみれば、荒屋の少なさ、中土の多さが際立つといえる。この点は、彫器の状況と対照的である。

両遺跡における搔器は、縦長剥片の先端に急角度な刃部を作出する先刃搔器が主体である。その中でも、荒屋では個体差が著しく様々な形態から構成されるのに対し、中土では形態的齊一性の高い大形品（1～5）が安定的に加わる。中土に特徴的な大形品と荒屋の大形品（1～3）とを比べると、2点の相違が認められる。

第1に、大きさである。荒屋では5cm以下の大さが主体であるのに対し、中土では長さ6～8cmほどの大きさが安定的に加わる。荒屋における搔器の大きさは、彫器の大きさと一致しており、多量に製作された彫器と同様の剥片が素材として用いられたと思われる。一方、中土に特徴的な大きさの彫器は数少ない。中土の搔器は、荒屋の搔器とは異なる過程を経て得られた剥片を素材としている可能性がある。

第2に、荒屋の搔器の基部側に裏面加工が特徴的に施されるが、中土にはそれが認められないことである。基部側の裏面加工は、しつくりと着柄させること等、使用時の都合にあわせて器体の反りを修整したのであろう。中土に認められないことは、そういった加工が不要であったことを意味しようか。そうであれば、中土の素材剥片の反りがより小さかったことを意味するのであろう。荒屋の搔器に形態的バラエティーが認められることは、素材剥片の形態的齊一性の低さを反映しているのかもしれない。

これらのほかに、荒屋では茸形を呈する角二山型搔器〔加藤稔1973・1991〕（8）・円形搔器（10）、中土では裏面加工の搔器（6）・拇指状搔器（7）・両面加工の刃部が作出される搔器（8）と、それぞれ特徴的な形態が加わる。また、両遺跡とも、刃部に裏面加工が伴う搔器が特徴的である（第10図2・6、第11図6・8）。このような搔器は、山形県角二山遺跡に特徴的であり、共通性を窺うことができる。

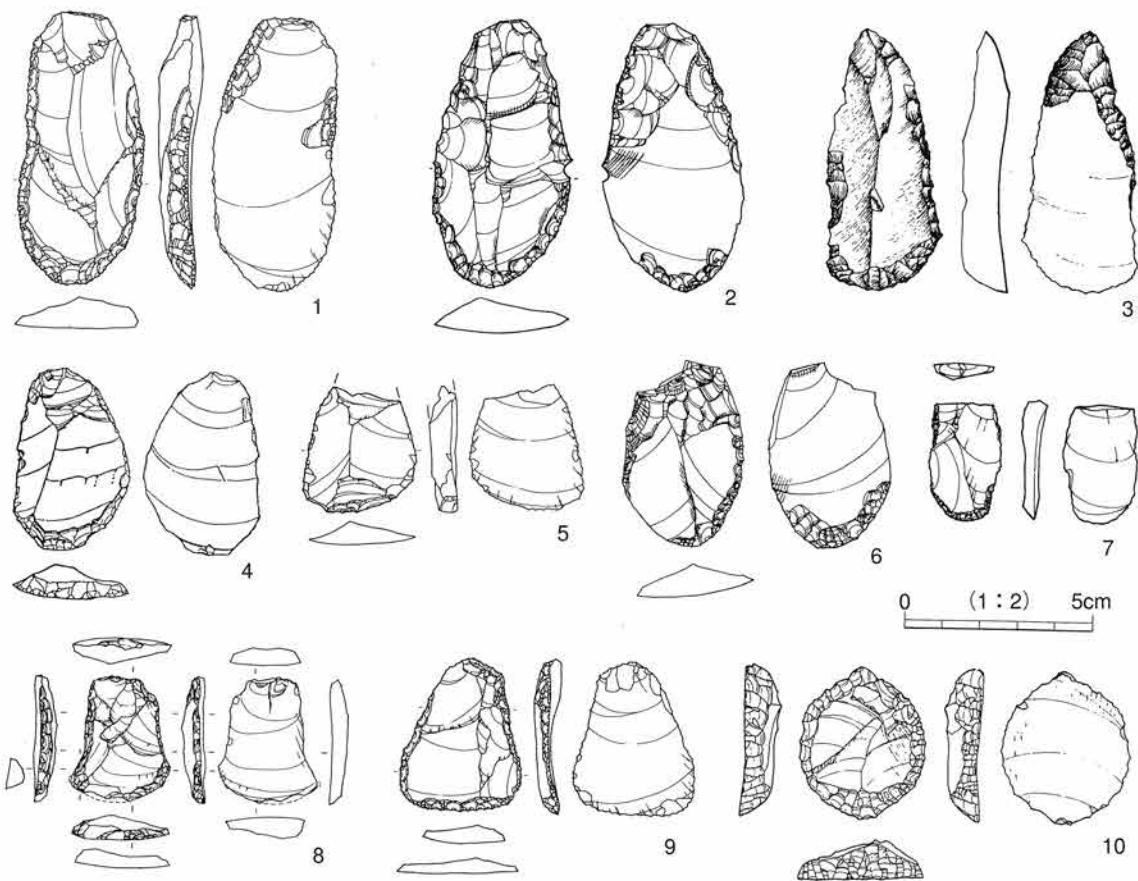
なお、加藤稔氏は、角二山型搔器を設定する際に、しばしば裏面加工が加わることを特徴としている〔加藤稔1973b〕。その後、「団扇形の平面形をもつものを、特に角二山型搔器と呼んでおく」〔加藤稔1991〕としており、近年では「茸形搔器＝角二山型搔器」という認識が浸透しつつある。こういった状況を鑑み、筆者は茸形であることを角二山型搔器の形態的条件とし、しばしば認められる裏面加工については付帯要素のひとつと理解している。〔加藤学1998、麻柄2000〕。

⑤ 搗器以外のスクレイパー

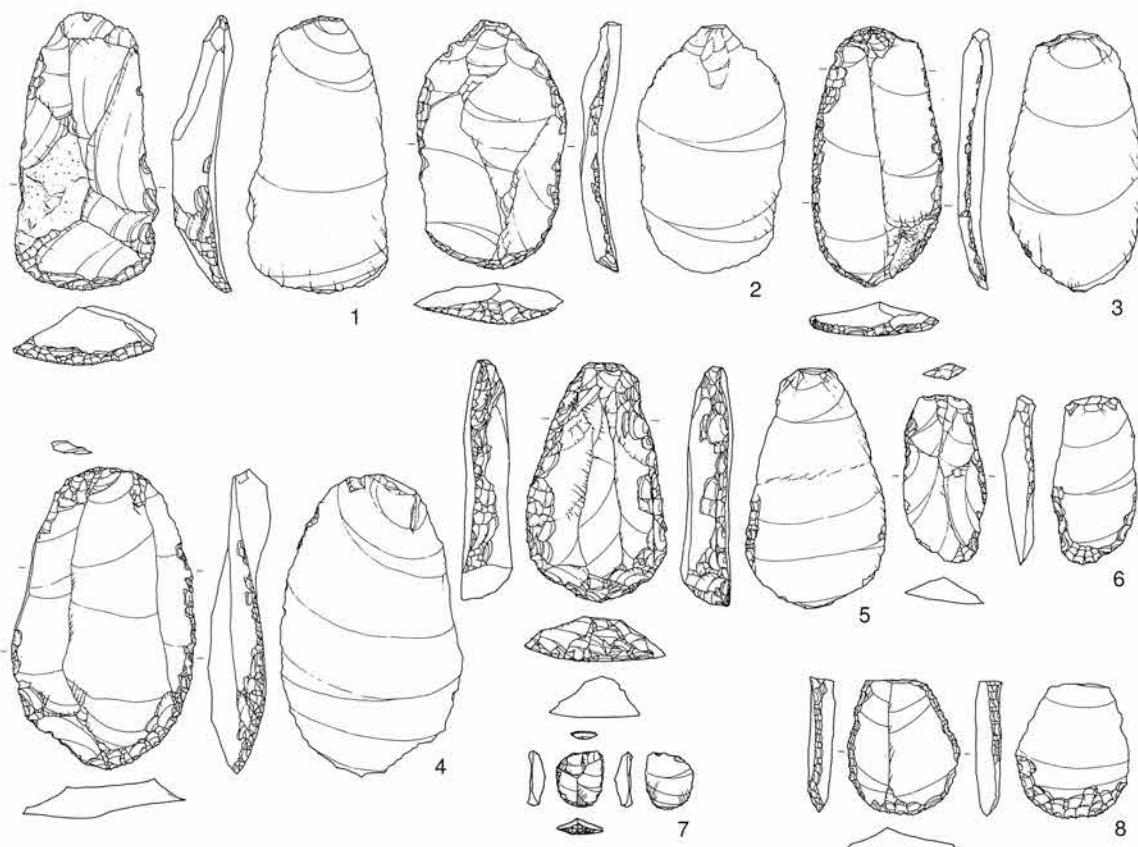
搔器以外のスクレイパーは両遺跡で認められるが、その分類の困難さから報告によって様々な名称が与えられている。また、中土においては当該期を象徴する指標的な形態以外、とりわけスクレイパー等をナイフ形石器石器群から分離する蓋然性について判断に迷うところもある。これらの事情から正確な数量の判断は難しく具体的な数値を示せないが、搔器と同程度の数量は認められるようである。

搔器を含めたスクレイパーは、縦長剥片を縦位に用いる例がほとんどである。個体差が著しく、両遺跡で明瞭な相違点を見出すことができないため、そのバラエティーを明らかにしたい。

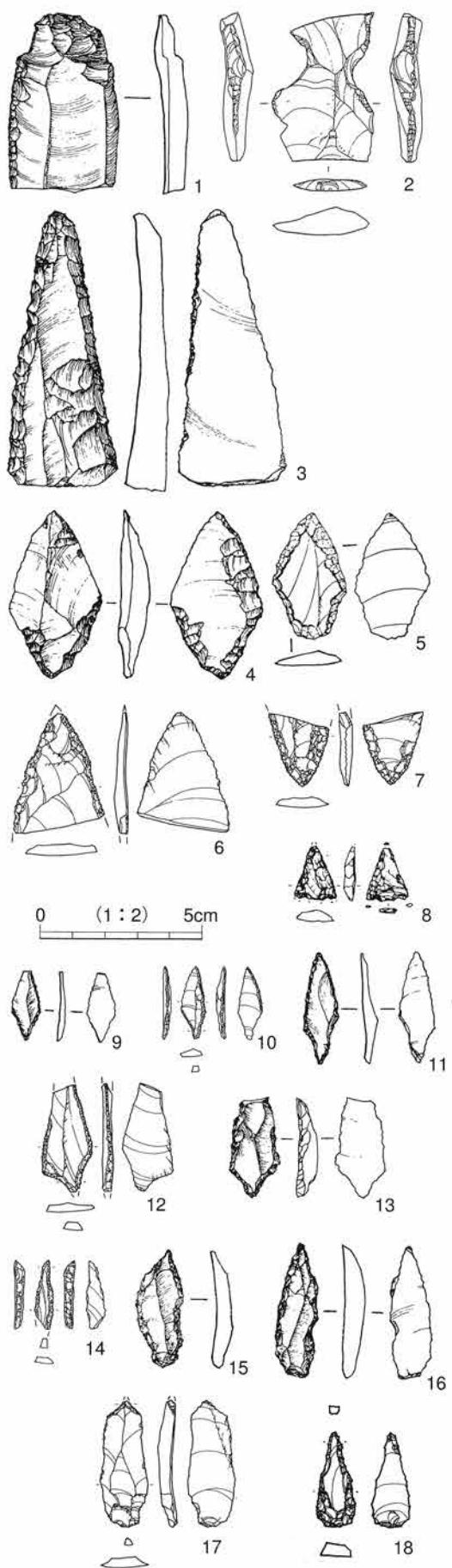
まず、最も多く認められるのが縦長剥片の両側縁に直線状の刃部を形成するものである（第12図1・3、第13図1～4）。その中には浅角度のものから急角度のものまで認められる。第13図1は縦長剥片の両側縁に浅角度の調整を施して、平面形態を四角形に仕上げたものであり、同様の形態は新潟県正面中島遺跡〔佐藤雅一ほか1996〕や長野県中ヶ原第1遺跡G地点〔八ヶ岳旧石器研究グループ1996〕等で存在する（第14図1・2）〔加藤学1996〕。第12図3や第13図2・3については、搔器との形態的連続性が認められる。あるいは、搔器と判断できるものであるかもしれない。第12図2は、いわゆるノッチド・スクレイパー（第



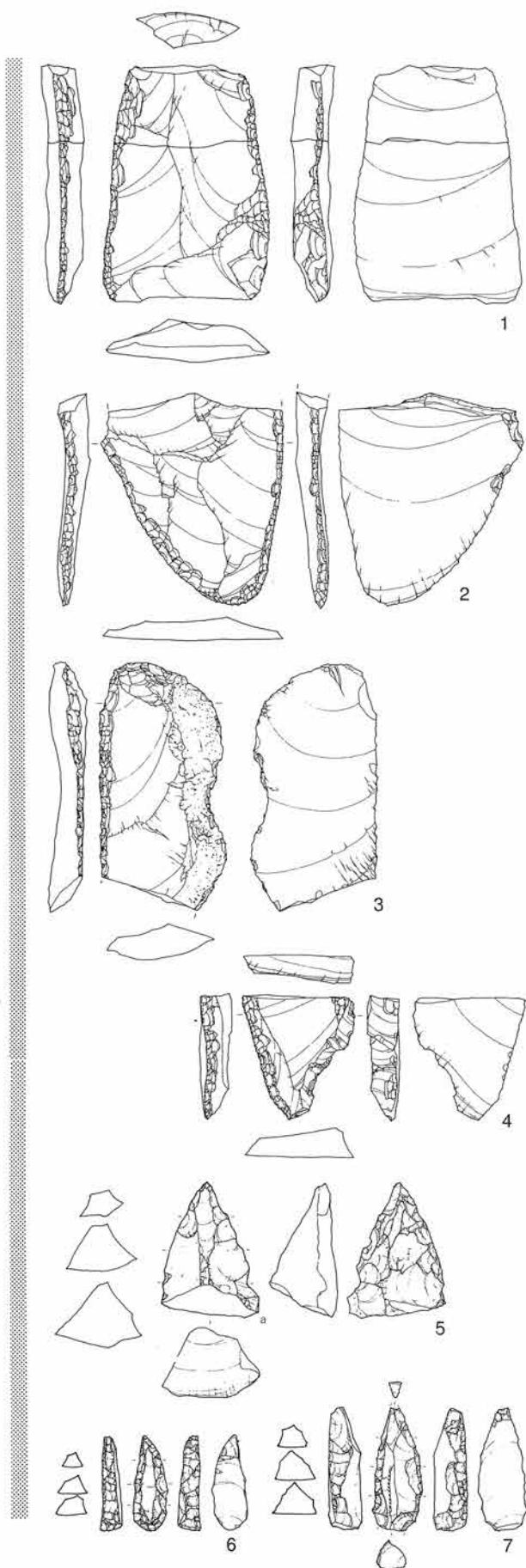
第10図 荒屋遺跡出土の搔器



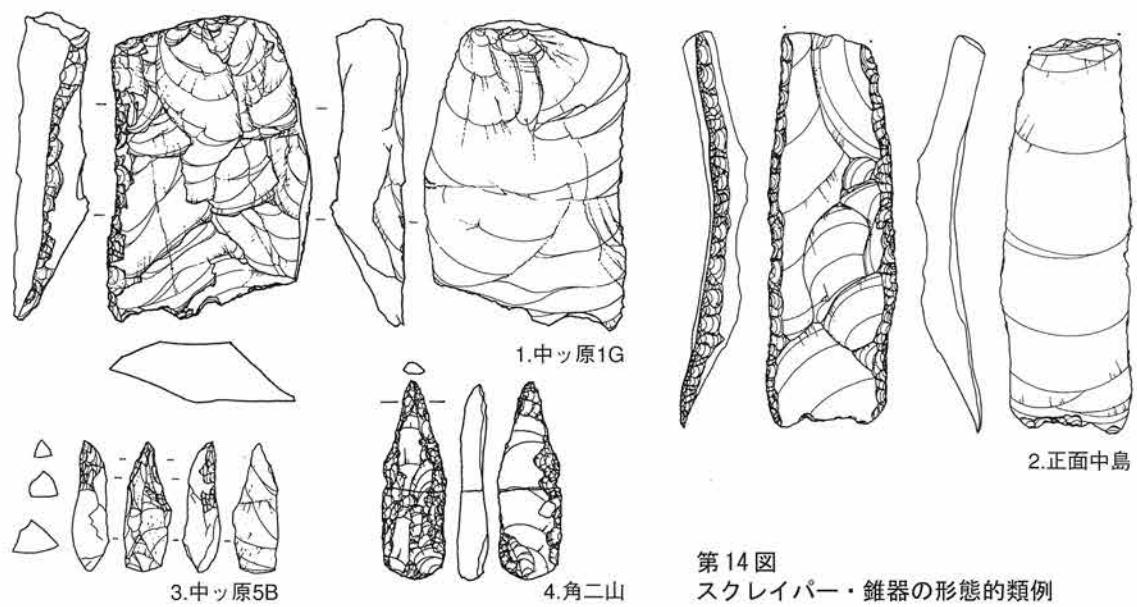
第11図 中土遺跡出土の搔器



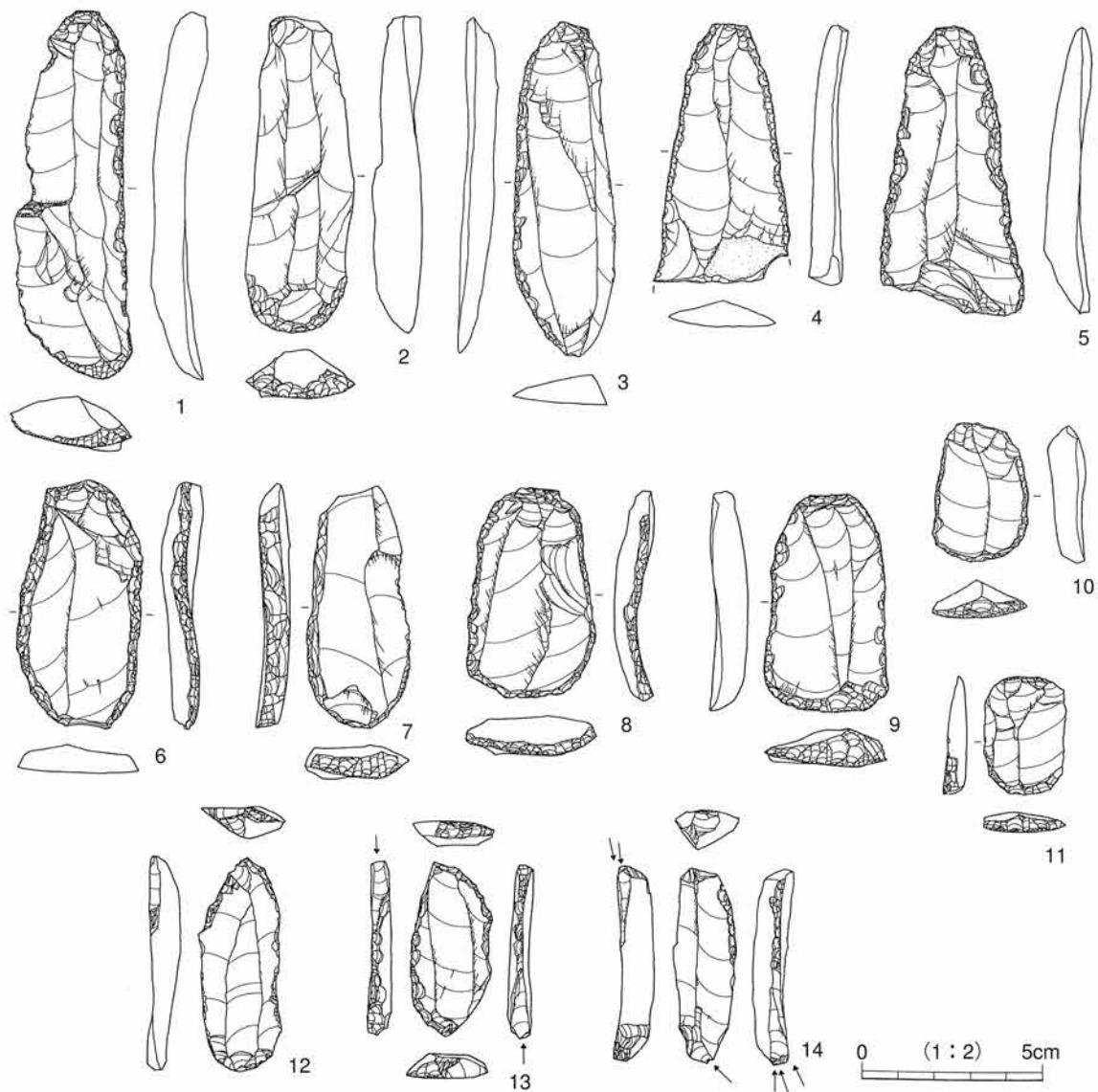
第12図 荒屋遺跡出土の石器



第13図 中土遺跡出土の石器



第14図
スクレイパー・錐器の形態的類例



第15図 正面中島遺跡出土の剥片石器

12図2)である。両側縁に大きな内弯状の刃部が作出されている。

このようにスクレイパーには形態的バラエティーが認められるものの、今後は刃部を形態的に検討することが課題といえる。特に、刃部の平面形態や剥離痕の組み合わせと刃角との相関関係を検討することは有効な方法になると思われる〔織笠明子1993、加藤学1998a〕。まずは、多様なスクレイパーの実態を明らかにする必要があろう。

⑥ 錐器

錐器は、荒屋で5点(第12図17・18)、中土で2点(第13図6・7)と、数少ないながらも加わる。殊に、断面三角形の細長い錐器(第12図18、第13図6・7)は、荒屋・中土のほかにも山形県角二山遺跡〔桜井1992〕・長野県中ッ原第5遺跡B地点〔八ヶ岳旧石器研究グループ1991〕でも認められ、いわゆる削片系細石刃石器群に特徴的に認められる形態と考えられる(第14図3・4)〔小口・堤1991〕。このほかに、錐部のみが作出されたものが荒屋遺跡で報告されている(第12図17)。

また、荒屋では菅沼直氏が鎌形石器に分類した第12図14〔菅沼1999〕、中村孝三郎氏が片面加工の小形尖頭器に分類した第12図15・16〔中村1965b〕など、錐器と形態的連続性を認めることができる一群が存在する。

⑦ 尖頭器

尖頭器は、荒屋で認められる(第12図4~7)。第1次調査の石器組成表〔芹沢1959b、芹沢ほか1990〕において5点が加わるとしている。第2次調査分については、概報で示された石器組成表には加えられていないが、出土状況の写真(PLATE23-1)と英文要旨には尖頭器が加わることが明記されている。出土状況の写真を見るかぎり、柳葉形の尖頭器と判断できる形態である。4・5は、中村孝三郎氏が指摘するように彫器の母型ともなり得る形態である〔中村1965b〕が、近年、菅沼直氏が紹介した6・7は、完形品ではないものの尖頭器に分類される確実な一例と考えたい。

中土では、第13図5の尖頭器が出土している。これは、再整理報告でナイフ形石器石器群に分類されているが、報告者のひとりである吉井雅勇氏は、その後、細石刃石器群に加わるものと評価している〔吉井1998〕。ただし、この資料は荒屋のものと比べると厚手である。

⑧ 鎌形石器

鎌形石器(End-Blade)は、「有茎の鎌形をしている。背面にはほとんど加工痕をとどめず、わずかに基部の舌状部に、剥離痕がみられるだけである。正面の周辺にはこまかくみじかい剥離が連続して加えられ、先端はするどく尖っている。これはComposite Toolの先端部にはめこまれ、側辺にならべた細石刃とひと組みの道具として用いられたと推定されよう。」と定義されている〔芹沢1959b〕。この種の形態は、荒屋遺跡で初めて確認されて以来、他の遺跡では確認されていない。

荒屋では、鎌形石器7点が確認されている(第12図9~14)。第1次調査と表面採集資料に認められ、第2・3次調査では出土していない。これらは、大きく2種類に分類できる。第1は、最大幅が中央よりやや基部側にあり、平面形が菱形に近いものである(9~11)。第2は、最大幅が基部にあり、舌部の左側に顕著なノッチ状の加工が施されることから舌部がやや左に寄り、左右非対称なものである(12・13)。

前者は他の分類と明らかに分離されるものであろうが、後者は他の分類と形態的に連続するものといえる。この点については、芹沢氏が「舌状部の作りかたは、彫刻刀の場合と同じである。」と指摘している〔芹沢1959b〕。すなわち、後者にみられるノッチ状の加工は、彫器の彫刀面作出の打面とよく似るのである。法量的にも彫器と一致することから、鎌形石器と分類されるものの一部は、彫器の素材とも考え得る形態と

いえる。

また、「片面加工の小形尖頭器」[中村 1965b] とされた 15・16 との連続性も窺え、さらにこれは錐器と共通するところもある。したがって、鎌形石器の一部については、彫器の素材や錐器と形態的連続性について検討する必要がある。

⑨ 石鎌

荒屋において、凹基有茎鎌 [鈴木道之助 1974] (第 12 図 8) の存在が指摘されている。織笠昭氏は、石鎌は縄文時代に一般的な石器であるとしながらも、本地方の縄文時代前半の中で普遍的に見出せるものではないとしている。そして、僅かに小瀬が沢洞窟 [中村 1960] に類例が認められるとしている。ただし、縄文時代後期以降に多数認められる凹基有茎鎌との共通性を視野に入れて検討する必要があろう。

(B) 石材組成

両遺跡とも、珪質頁岩などの頁岩類が主体である。大別分類では共通するものの、石質には相違が認められる。荒屋においては、光沢のある風化面が形成された珪質頁岩が極めて高率で用いられている。一方、中土においては、玉髓またはそれに近い頁岩が一定の割合含まれることが特徴的である。

なお、荒屋における珪質頁岩製石器の多さは特筆される。このことは、豊かな石材環境を反映している可能性もあるが、現段階では遺跡付近に有力な石材原産地は確認されていない。後に触れる特徴的な剥片剥離技術や細石刃製作過程の変異幅の大きさは、遠隔地から繰り返し石材が搬入された結果を反映しているのかもしれない。

珪質頁岩のほかにも、凝灰岩製や黒曜石製の石器も若干量、認められる。荒屋採集の黒曜石製石器の原産地同定では麦草峠・和田峠といった信州産と報告されている [藁科・東村 1996、立木 1996 b]。しかし、分析数は細石刃 2 点のみであり、北方の原産地からもたらされた可能性もある。

(C) 剥片剥離技術

① 石核および接合資料から

荒屋からは、1700 点以上にものぼる膨大な数の荒屋型彫器が出土しているのにもかかわらず、その石核と考えられる資料は数少ない。わずかに、扁平石核 (第 6 図 13) が荒屋型彫器の石核と考えられる資料である。むしろ、荒屋型彫器と相応する数の石核が出土していないことは、剥片剥離技術を考察する上で重要な点である。

加藤稔氏は「扁平石核を荒屋技法の母型と解釈する余地はある」と指摘している [加藤稔 1991]。第 6 図 12 の細石核原形は、扁平石核を断ち割るかのように削片を剥離している例であり、そのことを裏付けている [加藤学 1999]。すなわち、扁平石核は細石核の成形過程を示す資料と評価できよう。ちなみに、扁平石核の類例は、山形県越中山遺跡 S 地点出土の削器 (第 18 図 6) [加藤稔 1973a] がある [織笠昭 1979]。この石器は、削器と評価される所以となった二次加工が施されているものの、形態的には扁平石核と連続性をもって捉えられる。

このように、扁平石核と細石核との関連性を積極的に評価するならば、荒屋型彫器等、剥片石器の素材は、細石核の成形・整形時に生じた剥片が充てられたものと考えられる。荒屋における細石核と荒屋型彫器との接合資料 (第 6 図 3')、角二山遺跡における削片とスクレイパーとの接合資料 (第 18 図 7) は、そのことを証明している。この点については、大塚和義氏 [大塚 1968]、宇野修平氏・上野秀一氏 [宇野・上

野1975]、剣持みどり氏 [剣持1979]、橋本勝雄氏 [橋本1988]、桜井美枝氏 [桜井1992]、永塚俊司氏 [永塚1996・1997] らが指摘しているところである。

一方、中土ではそういったことを傍証する石核や接合資料が認められない。しかし、再整理報告において吉井雅勇氏は「素材背面の求心的剥離痕と衝角打面という特徴がある一定量観察できることから、両面調整体から生じた剥片が石器素材に用いられたことが窺え、換言すれば、原石（母岩）入手から、両面調整体製作までの一連の工程に、スクレイバー等の石器素材生産も組み込まれていたことが想定できる。」[新潟石器研究会1996] としている。

② 剥片石器の表面における剥離軸の構成から

両遺跡の剥片剥離過程を復原するとき、石核や接合資料が数少ないと、荒屋の報告書が刊行されていないこと、中土から出土した剥片が数少ないと、分析する上で大きな制約が伴う。このような状況において、剥片石器の形状や表面の剥離面構成の分析から検討することは有効な手段のひとつと考えられる。筆者は、荒屋型彫器の剥離軸構成を分析した経緯があり [加藤学1999]、ここでも同様の分析を行いたい（註5）。

【分析方法】

まず、裏面の剥離軸を一方向（剥離軸e）に固定して（註6）、表面を構成する剥離軸をa～hの8方向に分類する（第17図）。そして、表面を構成する各剥離軸の面数を累積して分析個体数で割る。ここで求められた数値は、ひとつの石器の表面を構成する平均的な剥離軸の組み合わせを表している。

例えば、グラフにおいて「剥離軸e」が「1」という数値を示せば、どの石器にも「剥離軸e」の剥離面「1面」が加わるのが平均的ということを意味している。また、数値が「0.5」であれば2点の石器に1面、「2」であれば1点の石器に2面ということになる。

【分析対象】

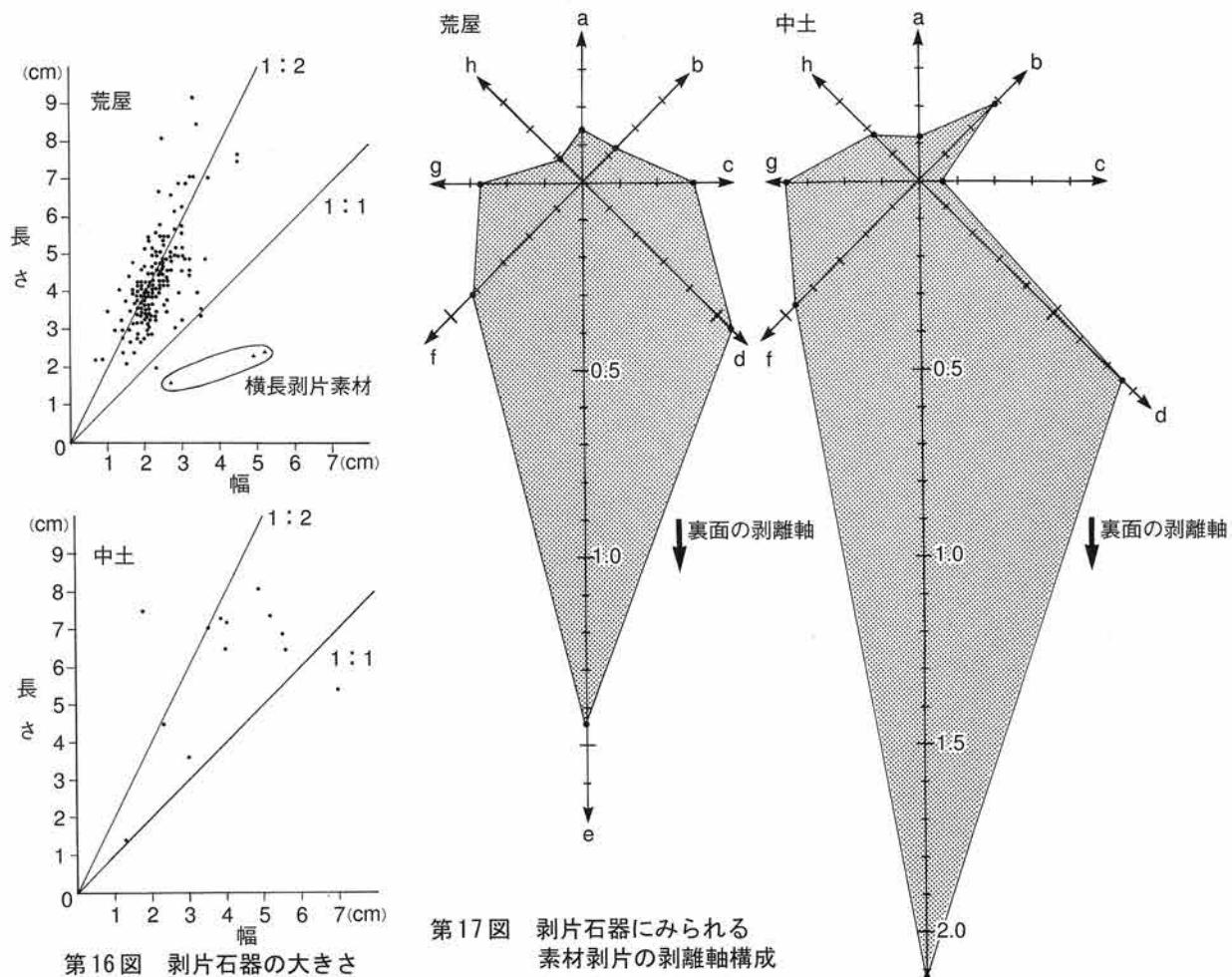
上記の方法は、剥片を対象としたときに最も有効である。二次加工により、本来、素材剥片が保有した剥離面が失われたケースが想定されるためである。しかし、剥片の特定の範囲だけが著しく失われたのではなければ、リスクは均等に配分されるものと予想される。したがって、データの有効性については、大勢に影響がないものと考えたい。今回は、共有している既報告の剥片石器を分析するが、欠損や二次加工の進行が著しく、素材剥片の状況を把握し難いものは除外した。

分析対象は、荒屋の剥片石器244点（彫器219点・彫器素材搔器3点・搔器13点・削器2点・錐器1点・鎌形石器6点）、中土の剥片石器17点（搔器9点・削器8点）である。

【分析結果】

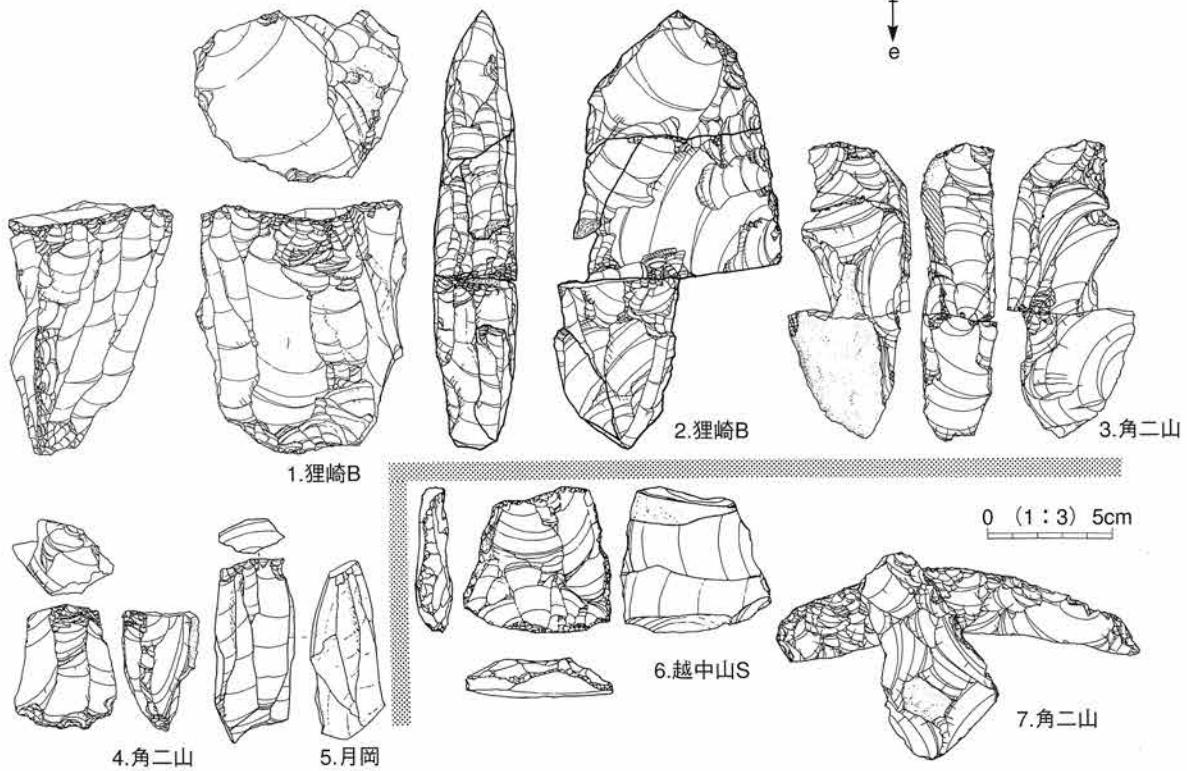
今回の分析結果を第17図に表した。このグラフからも明らかにおり、両遺跡とも裏面の剥離軸と一致する傾向が強いといえる。特に、中土では剥離軸eが2を超えており顕著である。裏面の剥離方向と一致するeを中心にd・fで大きな数値を示しており、これらは同一の打面からの剥片剥離によって形成されたと考えられる。素材剥片の多くは、表面を構成する剥離面の形成と一連の剥片剥離から得られたのであろう。

裏面の剥離軸と一致するもののほかに、それと直交する剥離軸c・gが両遺跡で安定的に加わる。およそ3～4点に1点の割合で加わる。ただし、1点の石器に集中的に認められることも多く、実質的な割合はもう少し小さいものと推測される。これらの剥離痕は、90度方向の打面転位が行われたことを示している。



第16図 剥片石器の大きさ

第17図 剥片石器にみられる
素材剥片の剥離軸構成



第18図 剥片剥離に関する資料

裏面と正反対の剥離軸aは、両遺跡とも小さな値を示している。おおよそ10点に1点ほどの割合で認められ、180度の打面転位の痕跡は少ないといえる。しかし、90度の打面転位を繰り返すことで180度打面を移動することはあったであろう。

以上より、表・裏面を構成する剥離面は、一連の剥片剥離から形成されたものが多いと考えられた。それに加えて90度の打面転位が行われていたことが推測された。こういった状況から考えるに、素材剥片が扁平石核から得られたとしても矛盾しない結果といえる。

③ 剥片石器の大きさ

剥片石器の大きさを示したのが第16図である。ただし、裏面の剥離軸に沿うように長さと幅を計測している。すなわち、素材剥片の大きさを意識しての計測といえる。なお、大きく欠損している資料は除いてある。

このグラフからは、両遺跡をめぐる剥片石器の大きさの相違を読み取ることができる。荒屋では長さ2.5～6cmの範囲に収まるのに対し、中土では6cmを超えるものが主体である。長幅比も、荒屋では1:2前後に集中するのに対し、中土では1:1～1:2の間に収まる。中土のほうが、より大きく、より幅広であることがわかる。ただし、二次加工による影響も考えなくてはならない。

中土の剥片石器は、素材剥片の末端部に二次加工を施す搔器が主体であり、より幅広という形態は二次加工によってもたらされた結論である可能性が高い。これに対し、荒屋における彫器は両側縁に二次加工が施されるため、細長い形態を強調するデータといえる。すなわち、ここで示した結果が素材剥片の大きさを示さないことも考慮しなくてはならない。しかし、こういった状況を考慮したとしても、中土における素材剥片のほうがより大形ということができる。

このように、荒屋と中土とでは明らかに素材剥片の大きさが異なる。中土のような大形の素材剥片は、細石核の成形時に得ていたとすれば、その初期段階に得ていたものと考えられる。第8図1・3の裏面にみられるような大きな剥離痕が、それと対応するのであろう。あるいは、細石核の成形に組み込んで考えるのではなく、まったく別途の剥片剥離過程を想定すべきかもしれない。

④ 素材剥片の用い方

両遺跡とも、縦長剥片を縦位に利用するものがほとんどである。縦長剥片に固執することは確実であるが、荒屋ではその限りでない。荒屋では、縦長剥片を斜位に用いる例（第9図2・8）、横長剥片を横位に用いる例（第9図6・13、第16図）が認められる。これらの事例は、素材の大きさを確保することがより重要であったことを傍証している。素材剥片の形状や用い方が、副次的な条件であった可能性を指摘できる。もっとも、全周に二次加工がおよぶことで素材剥片の形状が大きく変更される彫器については、素材剥片に一定の形態よりも一定の大きさを必要としたのであろう。

したがって、荒屋では細石核の成形時に生じた様々な形態の剥片を積極的に利用することができたのであろう。一方、中土に多くみられる先刃搔器は、荒屋の彫器と比べると形状修正の度合いが小さく、一定の大きさ・形態を確保した素材剥片が選択されていたものと考えられる。

⑤ 素材剥片の剥離過程

これまでに検討してきたように、荒屋の剥片石器は細石核の成形時に副次的に生じた剥片が充てられた可能性が高い。先に触れた、荒屋における細石核と荒屋型彫器の接合資料（第6図3'）等は、そのことを裏付けている。また、遺跡内に扁平石核の素材となりうる資料およびその製作過程を示す資料を積極的に認めることができない点も特筆される。現在、公表されている中では扁平石核が最も大きな資料であり、現

段階では扁平石核やその素材剥片のような状態で搬入されたものと想定される。搬入形態に関する問題は極めて重要であり、接合関係、礫面の残される頻度、遺跡周辺の石材環境等について十分に検討する必要があろう。

荒屋とは対照的に、中土では遺跡内で石器製作の痕跡がほとんど認められない。特に、安定的に加わる大形搔器の素材剥片製作は、中土以前の経由地で行われた可能性が高い。すなわち、我々の目前にある資料は、搬入された状態、もしくはそれに近い状態を表すと考えられるのである。中土以前に石器が経由した遺跡では、大形の剥片を安定的に製作する条件が整っていたということができよう。

すなわち、剥片石器の素材作出過程が荒屋と中土とでは異なることが予想される。剥離軸構成の分析結果からは、両遺跡間に相違を見出すことはできなかったものの、剥片石器の大きさは明らかに異なり、細石核の成形時の剥片が充てられたとしても荒屋とは異なる段階に得られたものと考えられよう。むしろ、別途の剥片剥離過程を想定する必要もあるう。

その可能性を示す資料が第18図1～5である。これらは、秋田県狸崎B遺跡〔菅原・石川1993〕・山形県角二山遺跡〔宇野・上野1975、桜井1992〕・新潟県月岡遺跡〔中村・小林1975、鈴木俊成1990〕から出土した石核である。一部に両設打面が認められるが、基本的には単設打面のものが多い。特に、第18図2・3のように、大形剥片の分割面を打面にした単設打面の石核が顕著に認められる。

こういった石核からは、いわゆる石刃に代表される縦長剥片が連続的に得られたと考えられる。これは、細石核の成形時に副次的に生じた剥片と比べると、より大きく、より齊一性の高い形態であったと想定される。新潟県正面中島遺跡〔佐藤雅一ほか1996、山本・安部1998〕では、剥片石器の素材に、大形の石刃が顕著に充てられており（第15図1～14）、そのような剥片剥離過程の存在を示唆している。中土例は、むしろこういったグループに分類すべきであるかもしれない。ただし、接合資料等、裏付けとなる資料が発見されていない現段階では、選択肢のひとつとしておきたい。

（D）細石刃製作技術

① 細石核の形態的比較

両遺跡における細石核の多くは、湧別技法によって作出されたものである。しかし、実際には似て非なるものであり、相違点を明らかにしたい。

第1に、細石刃製作技法の組み合わせである。中土では湧別技法のみであるのに対し、荒屋では湧別技法のほかにホロカ技法が加わる〔織笠昭1979〕。

第2に、湧別技法による細石核の細部加工の在り方である。中土では下縁により入念な調整が施されるのに対し、荒屋では比較的大ぶりな加工で留まる例が顕著である。このことは、細石刃剥離前の細石核原形についてもいいうことができる。中土では入念な細部加工によって端正な両面調整体を経ている（第8図3）のに対し、荒屋では扁平石核のように大ぶりな加工で留まる両面調整体から直に削片を剥離している例（第6図12）がある。ただし、荒屋では荒屋に特徴的な細石核を主体としながらも、そこに中土に特徴的な例が相伴っている〔織笠昭1979〕。荒屋採集資料の稜付削片（第7図1・2）は、中土と類似する両面調整体を経ていることを示す一例ということができよう。

第3に、湧別技法による細石核の形態的齊一性である。荒屋ではバラエティーに富むのに対し、中土では形態的齊一性が強い。中土では数量が少ないため一概にいえないが、荒屋では入念な加工が施されるものからそうでないものまで様々である。言い換えれば、荒屋では基本的な手順は守られるものの、製作の

過程により大きな変異の幅が認められるのである。母型（両面調整体）の形状、細部調整の程度、側面調整の有無、細石刃剥離作業面の設置位置に、その変異が表れている。これらの変異幅が、個体差を生み出している。あたかも、過程よりも最終的なプロポーションを重視しているようである。ホロカ技法による細石核は、こういった変異の表れのひとつといふことができるかもしれない。

第4に、湧別技法による細石核の大きさである。特に作業面長の相違は顕著で、荒屋ではより短く、中土ではより長い。このことは、細石刃の長さにも如実に反映されている。

以上のように、両遺跡の細石核には、様々な相違点が認められた。特に、両遺跡ともに認められる湧別技法による細石核は、似て非なるものという印象を強くもつた。

荒屋の類例としては、県内では月岡遺跡〔中村・小林1975、鈴木ほか1990〕、正面中島遺跡〔佐藤雅一ほか1996、山本・阿部1998〕が挙げられる。中土の類例としては、大平遺跡〔小野ほか1991〕、上ノ山C遺跡〔高橋1990〕、中道遺跡〔菅沼1991〕が挙げられるものの、中土例の細部調整の緻密さは群を抜いている。しかし、両者の形態差を明瞭に区分する一定の基準を示すことは難しい。実際、類例の選択は分類者間で異なるであろう。

② 細石刃製作技術の位置付け

立木宏明氏・吉井雅勇氏は、両遺跡の変遷観を東北地方の変遷観〔石井1987、桜井1991〕と照らし合わせながら、「削片系のみ保有する段階（中土・大平）から削片系+ホロカ型への段階（荒屋・月岡）が想定できる〔立木1996a〕」としている〔吉井1998・1999〕。すなわち、細石刃製作技法の組み合わせから変遷観を導き出している。

しかし、木村英明氏は、教科書的な『湧別技法』だけが単独に存在する石器群ではなく、ホロカ技法を含む複数の技法が一連の製作工程の中に含まれることを指摘しており〔木村1995〕、細石核の組み合わせをもつて変遷観を論じることには危険を伴う。また、荒屋にも中土のような細石核が存在すること〔織笠昭1979〕、荒屋と同列に扱われる月岡において長さ16cmを超える端正な稜付きの削片が存在すること〔中村・小林1975〕を勘案すると、両遺跡の細石核に認められる形態差を編年差に置き換えることは困難と思われる。むしろ、両遺跡に細石刃製作関連資料が如何なる状態で搬入され、如何なる範囲の細石刃製作過程が行われたのかを明らかにすることが重要と思われる。特に、石材原産地との関係を追求することが重要ではなかろうか。

おわりに

本稿では、両遺跡をめぐる共通点と相違点を明らかにすることを中心に検討してきた。その結果、相違点は、遺跡内に搬入された時点での形態の差、遺跡内で行われた石器製作過程の差、遺跡の利用頻度の差、遺跡の機能の差等、様々な要素に起因するものと考えられた。したがって、これまで何人かの研究者が指摘するように、相違点を編年差に置き換えることは困難と判断した。

地層の堆積状況に恵まれない新潟県においては、良好な堆積状況のもとで作成された編年観との対応関係を求めざるを得ないところが大きい。しかし、まずは個別石器の形態的検討を原点として、各遺跡の実態を可能な限り正確に把握する必要がある。その上で遺跡間、地域間における比較検討を実践すべきであろう。

ただし、荒屋と中土を比較検討するには「見えない部分」が多すぎるという現実もある。こういった制約があったとしても、共通点と相違点を具体的に示すことで、石器群の実態を明らかにしなくてはならぬ

い。このことは、多様な解釈を生むために最も優先させなくてはならない課題であり、重大な条件整備といえる。先決すべき問題ひとつひとつを十分に吟味する必要性を強調しておきたい。

謝辞

本稿は、吉井雅勇氏の精力的な研究〔吉井1998・1999〕から多大なる刺激を受けたことを契機として起草したものである。氏の、新潟考古学談話会、新潟石器研究会における研究発表に対し、筆者は異なる見解を示し、多くのご指摘を賜った。本稿が、そういった議論の上に立脚していることを付記しておきたい。

本稿を草するにあたっては、次の方々から貴重なご指導とご教示を賜った。ここに深く感謝を申し上げたい。

織笠 昭先生、織笠明子氏、川口武彦氏、佐藤雅一氏、澤田 敦氏、鈴木俊成氏、高橋春栄氏、

立木宏明氏、堤 隆氏、中沢祐一氏、山本 克氏、吉井雅勇氏

註

1) 東北日本の細石刃石器群の変遷観を考察する上で欠くことのできない『樽口遺跡』の文化層分離〔立木1996b〕の方法を疑問視する見解がある。佐藤雅一氏は、立木宏明氏の文化層分離について層位的に検討把握がなされていないことを指摘し、「すべてを時間軸で整理するばかりでなく、空間軸における同時性も解釈の射程に入れ込んで吟味する必要がある」ことを指摘している〔佐藤雅一1999〕。

樽口遺跡の細石刃石器群は、白滝型細石核を有する文化層A-MS文化層とホロカ型細石核を有するA-MH文化層とに分離されているが、平面的・垂直的に分布は重複する。報告では、「お互いのブロック間に母岩の共有も無く、遺物の平面分布にも差があり」両石器群の並存は考え難いとしているが、平面分布は連続性を持って捉えることもできる。そこで立木氏は、石器形態および石材の相違、多く得られた接合資料などから、文化層を分離したという。

文化層分離については、調査担当者自身が調査時の所見をもとに慎重に分離していることはいうまでもない。すなわち、報告書の文化層分離が最も信頼できる記載であるという前提に立つ必要があろう。もちろん、第三者では判断しかねる要素も多々はらんでいるのであろうが、平面分布・垂直分布とも重複する石器群を意図的に分離することに問題はなかろうか。石器の形態や母岩の共有関係を検討しても、恣意的な文化層分離になってしまふ恐れがある。

実際、2000年5月～6月に発掘調査された新潟県中魚沼郡津南町上原E遺跡では、樽口遺跡で文化層を異にして出土しているような細石核が同一のブロックで同一層準から出土しており〔山本2000〕、極めて一括性の高い資料群〔佐藤雅一2000〕と評価されている。上原E遺跡の調査成果を踏まえて、樽口遺跡における文化層分離を再度検討する必要があろう。

2) 富樫雅彦氏の資料紹介〔富樫1990〕において、技術形態学的に「彫器」と分類されたものを、本稿では細石核原形と捉えておきたい。この資料は、扁平石核と細石核原形、双方の特徴を兼ね備えた形態と考えられる〔加藤学1998b〕。

3) 筆者は、荒屋型彫器の形態的範囲について、芹沢長介氏が『貝塚』誌上に最初に著した定義に基づくべきであるという立場を表明したことがある〔加藤学1999〕。すなわち、「やや縦に長い剥片を用いて、両側をまず片面加工の尖頭器のように仕上げたうえ、左肩に彫刻刀面をつくるのが通例である。主要剥離面の基部側に、こまかい調整痕を残す例も少なくない。〔芹沢1958〕」といった定義を基準に考えたい。詳細については、拙稿を参照されたい。

4) 1998年に新潟大学で行われた「第2回 東北日本の旧石器文化を語る会」において、芹沢長介氏によって紹介された〔佐藤宏之1992〕。

5) 同様に素材剥片の背面における剥離軸の構成を分析した例として、柳田俊雄氏の論考〔柳田1980〕や新田浩三氏による継続的な実践例〔新田1986など〕などがある。柳田氏は、ナイフ形石器の背面に残された剥離軸を検討し、剥片剥離技術の相違を導き出している。新田氏は、千葉県内における旧石器時代の報告書執筆に際して一定の視点で継続的に分析しており、膨大なデータを提供している。

6) かつて公表した拙稿〔加藤学1999〕では、裏面の剥離軸を「方向a」に固定したが、本稿からは通常の剥片の分析と同様に裏面の剥離軸を「方向e」に固定して分析することとしたい。なお、裏面の剥離軸を「方向a」にあわせたグラフについては、180度反転することで、まったく同じデータとなる。なお、荒屋のデータは、彫器の補足資料、彫器以外の剥片石器を分析対象に加えたため、若干異なるグラフとなっている。しかし、解釈を変更するほどの相違ではないと考えられる。

引用・参考文献

麻生 優 1965 「細石器文化」『日本の考古学1 先土器時代』河出書房

安蒜政雄 1979 「日本の細石核」『駿台史学』第47号 駿台史学会

安蒜政雄 1983 「縦長ナイフ形石器の製作」『季刊 考古学』4 雄山閣

石井浩幸 1986 「越中山遺跡群における細石器文化の探求－湧別技法による細石刃生産技術をめぐって－」『庄内考古学』20 庄内考古学研究会

石井浩幸 1987 「細石器文化の技術基盤と展開－東北地方における細石刃生産技術の実態－」『山大史学』6

伊藤典子 1996 「荒屋型彫刻刀の使用痕研究」『東北史学会研究発表プログラム』東北史学会

宇野修平・上野秀一 1975 「角二山遺跡」『日本の旧石器文化』2 雄山閣

大塚和義 1968 「本州における湧別技法に関する一考察」『信濃』20-4 信濃史学会

小口達志・堤 隆 1991 「中ッ原第5遺跡B地点の石器組成について」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ

小野 昭・菅沼 亘・藤田英忠 1991 「水原町大平遺跡の調査」『水原郷土誌料』22 水原町教育委員会

織笠明子 1993 「スクレイパー刃部の形態的研究」『大和市史研究』19 神奈川県大和市役所

織笠 昭 1979 「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』47 駿台史学会

織笠 昭 1983 「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論文集1－』文献出版

織笠 昭 1984 「細石器文化組成論」『駿台史学』第60号 駿台史学会

織笠 昭 1993 「日本列島における細石刃の研究」『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』国際シンポジウム実行委員会

織笠 昭 1994 「日本列島の細石器文化」『中日古人類・史前文化淵源関係国際学術研究討論会 柳州国際シンポジューム発表要旨』別府大学

織笠 昭・織笠明子 1997 「1996年の考古学界の動向 旧石器時代（東日本）」『考古学ジャーナル』423 ニュー・サイエンス社

梶原 洋 1991 「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点』日本考古学協会宮城仙台大会シンポジウム資料集

加藤暁生 1985 「前田耕地遺跡出土の魚類頸歯について」『東京の遺跡』7 東京考古学談話会

加藤晋平・松本美枝子 1984 「日本細石刃文化の起源」『史艸』25

加藤晋平 1984 「日本細石器文化の出現」『駿台史学』第60号 駿台史学会

加藤博文 1996a 「細石刃石器群における生業活動の検討（上）（下）－シベリアからの視点－」『古代文化』48-3・4 財團法人 古代學協會

加藤博文 1996b 「モービル・トゥールとしての両面調整石器－縄文化にむかう技術組織の変動－」『考古学雑誌』西野元先生退官記念論文集

加藤 学 1996 「中ッ原5B地点・1G地点をめぐる行動形態の復原－細石器文化期における素描－」『中ッ原第1遺跡G地点の研究II』八ヶ岳旧石器研究グループ

加藤 学 1998a 「小瀬が沢洞窟・室谷洞窟採集の遺物－スクレイパー刃部剥離痕の形態的検討を中心として－」『研究紀要』2 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

加藤 学 1998b 「いわゆる角二山型搔器の検討－荒屋遺跡採集の搔器から－」『新潟考古学談話会会報』19 新潟考古学談話会

加藤 学 1999 「荒屋型彫器の地域間対比－素材剥片の検討を中心として－」『新潟考古学談話会会報』20 新潟考古学談話会

加藤 稔 1973a 「越中山遺跡の研究・序説」山形県朝日村教育委員会

加藤 稔 1973b 「東北地方の旧石器文化」『山形県立山形中央高等学校 研究紀要』3 山形県立山形中央高等学校

加藤 稔 1991 「東北日本の細石器文化の展開」『山形県立博物館研究報告』12 山形県立博物館

加藤 稔 1992 「東北日本の旧石器文化」考古学選書35 雄山閣

木村英明 1995 「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31 北海道考古学会

剣持みどり 1979 「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古』3-2 山形考古学会

桜井美枝 1991 「北方系細石刃文化の南下」『考古学ジャーナル』341 ニュー・サイエンス社

桜井美枝 1992 「細石刃石器群の技術的構造－山形県角二山遺跡の分析－」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』

佐藤達夫 1974 「黎明期の日本」『図説 日本の歴史』1 集英社

佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説－関東地方を中心に－」『法政大学大学院紀要』29 法政大学大学院

佐藤雅一・岡修司・山本 克・和田秀一・成田健太郎・安部英二 1996 「新潟県中魚沼郡津南町の旧石器時代遺跡」『第10回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』東北日本の旧石器文化を語る会

佐藤雅一 1999 「第IV章まとめ 3. 総括」『下モ原II遺跡 小坂平遺跡』津南町文化財調査報告 第27輯 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会

佐藤雅一 2000 「まとめ」『津南町遺跡発掘調査概要報告書2000』津南町文化財調査報告書第33輯 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会

菅沼 宜 1991 「北蒲原郡安田町中道遺跡の細石核」『北越考古学』4 北越考古学研究会

菅沼 宜 1999 「北魚沼郡川口町荒屋遺跡の採集資料について—彫刻刀形石器の分析を中心に—」『新潟考古』10 新潟県考古学会

菅沼 宜・野尻湖人類考古グループ 1994 「野尻湖周辺の細石刃石器群」『野尻湖博物館研究報告』2 長野県信濃町立野尻湖博物館

菅原俊行・石川恵美子 1993 『狸崎B遺跡・地蔵田B遺跡』秋田市教育委員会

杉原莊介 1974 『日本先土器時代の研究』講談社

鈴木俊成 1990 『月岡遺跡・古長沢遺跡』堀之内町文化財調査報告書第4集 堀之内町教育委員会

鈴木忠司 1985 「再論 日本細石刃文化の地理的背景—生業論への視点—」『論集 日本原史』吉川弘文館

鈴木道之助 1974 「縄文時代晚期における石鏃小考—所謂飛行機鏃と晚期石鏃について—」『古代文化』26-7 財團法人 古代學協會

S. A. セミヨーノフ (田中 琢抄訳) 1968 「石器の用途と使用痕」『考古学研究』14-4 考古学研究会

芹沢長介 1954 「信濃・矢出川遺跡の調査」『日本考古学協会第14回総会研究発表要旨』日本考古学協会

芹沢長介 1958 「細石器問題の進展 (その一)」『貝塚』82

芹沢長介 1959a 「ローム層中に潜む文化 先縄文時代」『世界考古学大系1 日本I』平凡社

芹沢長介 1959b 「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について (予報)」『第四紀研究』1-5 日本第四紀学会

芹沢長介 1961 「日本における細石器文化」『歴史教育』9-3 日本書院

芹沢長介 1974 『古代史発掘1 最古の狩人たち』講談社

芹沢長介 1986 『旧石器の知識』考古学シリーズ11 東京美術

芹沢長介・須藤隆・会田容弘・山田しよう 1990 『荒屋遺跡—第2・3次発掘調査概報—』東北大学文学部考古学研究室・川口町教育委員会

高橋春栄 1990 「新発田市上ノ山C遺跡採集の舟底形細石刃核」『北越考古学』3 北越考古学研究会

高橋春栄・沢田 敦・立木宏明・菅沼 宜・吉井雅勇 1993 「中部北半・北陸地方の細石刃文化」『細石刃研究の新たなる展開II 列島諸地域における細石刃文化の様相』佐久考古学会・八ヶ岳旧石器研究グループ

滝沢 浩 1964 「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化』3 物質文化研究会

竹岡俊樹 1996 「彫刻刀形石器の分析 (上) (下) —『荒屋型・神山型・上ヶ屋型彫器』の再検討—」『古代文化』48-7・9 財團法人 古代學協會

千葉英一 1989 「北海道の細石器文化」『考古学ジャーナル』306 ニュー・サイエンス社

立木宏明 1988 「(2) 旧石器時代の遺跡」『FIELD NOTE』5 新潟大学考古学研究部

立木宏明 1996a 「中部地方北部における後期旧石器時代後半から縄文時代草創期前半の石器群の検討」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会

立木宏明 1996b 『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書V 樽口遺跡』朝日村文化財報告書第11集 新潟県岩船郡朝日村教育委員会

堤 隆 1997 「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定—埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析から—」『旧石器考古学』54 旧石器文化談話会

鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号 駿台史学会

富樫雅彦 1990 「荒屋遺跡採集の石器について」『新潟考古』1 新潟県考古学会

徳澤啓一 1999 「星野コレクションの記録 川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』4 越佐補遺些の会

永塚俊司 1996 「細石刃生産システムとその工程分割・遺跡間連鎖」『中ッ原第1遺跡G地点の研究II』八ヶ岳旧石器研究グループ

永塚俊司 1997 「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3 発掘者談話会

中村孝三郎 1960 『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館研究調査報告3 長岡市立科学博物館

中村孝三郎 1961 『越後の石器』長岡市立科学博物館研究調査報告 第4冊 長岡市立科学博物館

中村孝三郎 1965a 「中部地方北部の先土器時代」『日本の考古学1 先土器時代』河出書房

中村孝三郎 1965b 『中土遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告 第7冊 長岡市立科学博物館

中村孝三郎 1966 『先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館

中村孝三郎・小林達雄 1975 「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』1 雄山閣

新潟石器研究会 1996 「新潟県中土遺跡出土遺物の再検討」『長岡市立科学博物館研究報告』第31号 長岡市立科学博物館

新田浩三 1986 「石器群の比較研究に関するノート」『研究連絡誌』第18号 財團法人千葉県文化財センター

橋本勝雄 1988 「研究ノート 千葉県佐倉市木戸場遺跡A地点「第1・第2ユニット」から」『研究連絡誌』第4号 財團法人千葉県文化財センター

橋本勝雄 1998 「東日本の細石器文化—東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究の動向—」『考古学ジャーナル』306 ニュー・サイエンス社

福井淳一 1999 『柏台1遺跡』 北埋調報138 財団法人北海道埋蔵文化財センター

麻柄一志 2000 「角二山型搔器」『旧石器考古学辞典』旧石器文化談話会編 学生社

美安慶子 1995 「荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器について」『佐久考古通信』65 佐久考古学会

Morlan, R.E. 1967 The preceramic period Hokkaido. *An Outline Arctic Anthropology.* IV-1

矢島國雄 1979 「東北地方の細石器文化」『駿台史学』第47号 駿台史学会

八ヶ岳旧石器研究グループ 1991 『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ

八ヶ岳旧石器研究グループ 1995 『中ッ原第1遺跡G地点の研究 I』八ヶ岳旧石器研究グループ

八ヶ岳旧石器研究グループ 1996 『中ッ原第1遺跡G地点の研究 II』八ヶ岳旧石器研究グループ

柳田俊雄 1980 「ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会

山田晃弘 1984 「彫刻刀形石器の製作技術」『考古学ジャーナル』229 ニュー・サイエンス社

山本 克 1998 「川口町荒屋遺跡採集の彫刻刀形石器」『越佐補遺些』3 越佐補遺些の会

山本 克・安部英二 1998 「正面中島遺跡」『平成10年度 津南町遺跡発掘調査概要報告書』津南町文化財調査報告書第24輯 津南町教育委員会

山本 克 2000 「上原E遺跡」『津南町遺跡発掘調査概要報告書2000』津南町文化財調査報告書第33輯 新潟県中魚沼郡津南町教育委員会

横山裕平 1993 「東日本における細石刃石器群」『北方ユーラシアにおける細石刃石器群の起源と拡散』国際シンポジウム実行委員会

吉井雅勇 1998 「新潟県における北方系細石刃石器群について」『新潟考古学談話会会報』第19号 新潟考古学談話会

吉井雅勇 1999 「第1章 旧石器時代 第5項 細石刃石器群」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院

吉崎昌一 1961 「白滝遺跡と北海道の無土器文化」『民族學研究』26-1 誠文堂新光社

吉崎昌一 1963 「本州および大陸の中・旧石器文化との対比」『白滝遺跡の研究』白滝団体研究会

綿貫俊一・堤 隆 1987 「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54 長野県考古学会

藁科哲男・東村武信 1996 「樽口遺跡出土の黒曜石、安山岩製遺物の石材产地分析」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書V 樽口遺跡』朝日村文化財報告書第11集 新潟県岩船郡朝日村教育委員会

図・表の出典

第1図 吉井1998

第2図 1: 中村1965b、2~7・12~15・綿貫・堤1987、8~11・16~20: 立木1988、21~38: 杉原1974
細石核の作業面: 第6図に同じ

第3図 新潟石器研究会1996

第5図 織笠昭1993・1994に一部加筆

第6図 1・6・8・9・13: 織笠昭1979、2: 菅沼1999、3・4・7・10~11: 芹沢ほか1990、5: 中村1965b

第7図 1・2: 中村1965b、3・5・7: 芹沢ほか1990、4・6・8: 菅沼1999

第8図 新潟石器研究会1996

第9図 1・9: 中村1965b、2・6: 美安1995、3・7・25・33・34: 綿貫・堤1987、4・14・16・19・27: 菅沼1999、5・8・10~13・15・18・20~24・26・28~30: 芹沢ほか1990、17: 山田1984、31・32: 杉原1974

第10図 1・5・9: 菅沼1999、2・6・7: 芹沢ほか1990、3: 中村1965b、4: 杉原1974、8: 加藤学1998、10: 立木1988

第11図 新潟石器研究会1996

第12図 1・3・4・9・11・13・15・16: 中村1965b、2: 立木1988、5: 杉原1974、8: 織笠昭1979、6・7・10・12・14・17: 菅沼1999、18: 芹沢ほか1990

第13図 新潟石器研究会1996

第14図 1: 八ヶ岳旧石器研究グループ1996、2: 佐藤雅一ほか1996、3: 八ヶ岳旧石器研究グループ1991、4: 桜井1992

第15図 山本・安部1998

第18図 1・2: 菅原・石川1993、3・4・7: 桜井1992、5: 中村・小林1975、6: 加藤稔1973a

第2表 新潟石器研究会1996